ト工6W-66
32-353

文學士 皆川正禧譯

ワグネル物語

東京 內外出版協會

41 4 24

RICHARD WAGNER.

1813-1883.

はしがき

小説や劇曲を紹介するに批評や筋書の外に其梗概を物語にして傳へる一法がある。此法は原作の技巧や構想を呑込ませる點に於て益に立たぬが、原作に用ゐた材料を面白く解らせるに於て有効なるのみならず、其自身一個の作品として價値を有することが出來る。

て古今の傑作は何れも此種の紹介法で普及せられて居る。

此書はストーリース、プロム、ワグナーと云ふ英語の書から譯出したのだ。これで以てワグネルが歌劇を窺ふことは出來まいが彼が爲めに詩化された材料が少くも原始の粗笨な姿とはなッて居らぬであらう。

明治四十一年三月　東京にて　譯者

ワグネルと其の著作

詩人として、歌劇改革者として、十九世紀を照らす文藝界の一明星、キルヘルム・リカルド・ワグネルは、千八百十三年五月廿二日、獨逸のライプチッヒに生れた。父は同市警視廳の書記であったが、ワグネルの生後數月にして歿したので、母は再婚し、ドレスデンに移った。で、彼が少年時代の敎育は、重にドレスデンで受けたのであるが、千八百三十年に、ライプチッヒのニコライ學校に轉ずることゝなった。音樂の研究に熱中したのは、實に此の時代で、ベートーフェン崇拜者であったと云ふ。しかも此處にあること若干ならず、長兄アルベルトに從って、ウルツブルグの劇場に樂長として現はれたのは、彼が二十一歳の時である。次いでマグデブルグに、ケーニッヒベルヒに、樂長として劇場に出たが、勿論未だ名を成すに至らなかった。千八百三十六年にケーニッ

ヒベルヒの女優キルヘルミナ・ヘラヴネルと結婚し、後三年にして佛都パリーに赴き、千八百四十二年まで此地の劇場に地盤を造らうとしたが、悉く失敗に終ッた。けれども此放浪の間、彼は著々自家の研鑽を進め、千八百四十年、彼が第一の創作と稱へられるファウストを完成させた。四十一年には、フリーゲンデ、ホレンデル（幽靈船と譯した）が場に上せられた。またタンホイゼルの傳説を手に入れて、此が製作に著手したのも此頃である。バリーに志を得なかッたワグネルは、其地を辭して再びドレスデンに歸り、此處に其のリエンジを場に上せたが、始めて幾分の成功を收めることが出來た。四十三年から四十九年まで、彼はドレスデンの禁苑樂長（カペルマイスター）である。其の間にタンホイゼルを完結し、此を登場せしめたが、寧ろ失敗に終はり、窮乏身に迫るに至ッた。且つ、千八百四十九年の革命黨に與したと云ふので、殆んど禁錮せられるところを、辛く脱れてバリーに走ッた。それより、チュリッヒに、ロンドンに、三度びバリーに、南船北馬、具

に苦慘を嘗めた後、彼が令名は漸く高く、千八百六十一年、バヴリア王ルドヰッヒ二世の召に應じて、故國に歸ることが出來た。これよりは平和の時代で、ムニッヒに居を卜する、コスミア、リスツと結婚する、七十二年よりワグネル劇場が著手せられる、王より受ける年金は、安んじて彼を創作に從事せしめることが出來たのである。ワグネル劇場が落成したのは、千八百七十二年で、第一に此處に演ぜられたのは、彼が最苦心の作、ニベルンゲンの四段劇であッた。八十二年に、彼が最後の傑作バァシファルが演ぜられた。七十七年、ワグネルまたロンドンを訪ふ、此程より健康を害ひ、去ッて南の方伊太利に、靜かに保養を加へたのも甲斐なく、千八百八十三年二月二十三日、伊太利のヴェニスに歿した。以上はワグネルが生涯の略歴である。

ワグネルが歌劇の特徴とも云ふべきものを擧げると、その詩材が多く獨逸民族の神話や傳説より取られたこと、詩趣、音樂幷びに脚色が、各自その價

値を發揮しながらも、渾然融和して居ること、從來の對照的動作を重んじ、兎角、勸善懲惡主義に傾いた伊太利歌劇の舊套を脱した點、巧に人心の機微を描出して、感興を繼續せしめるの妙、器樂、舞臺景の使用を増加して、著しく此が効果を收めた點に存すると言はれる。

以上記載したるワグネルが重なる作を列記すると、

リエンヂ――一八四二

デル、フリーゲンデ、ホレンデル（幽靈船）――一八四三

タンホイゼル――一八四五

ローヘングリン（鵠の武士）――一八五〇

デル、リングス、デス、ニベルンゲン（呪詛の指環）――一八七六

トリスタン、ウント、イソルテ（王妃のなげき）――一八六五

ヂー、スイステルジンゲル（歌曲の長）――一八六八

パルシファル――一八八二

であるが、其他、前奏曲、ソナタ、小曲歌等の外に、「將來の藝術」「ベートーフェン」、「宗教と藝術」などの論文が著名である。

目次

リエンジ……一
幽靈船……三七
歌客タンホイゼル……七九
鶴の武士……一一四
王妃が歎き……一五三
歌曲の長……一九二
呪詛の指環……二四五

ワグネル物語

リエンジ……最終の保民官

ローマが未だ盛大の頃には、人民から選出された保民官（トリビュン）といふものがあつた。此保民官等は人民の意思によつてこそ動け、時には莫大の權力を握つたものであつた。即ち法律の制定、宣戰講和の事、其他王といへども許されなかつたやうな實權を持つてゐたのである。然しながら保民官の時代も過ぎ行く世紀と共に歴史上の事蹟になつてしまつて、ローマ大帝國は廢頽に瀕し、人民は屢々上に眞正の政府を戴かずにゐた。外には强敵がある。内には爭擾が絶えぬ。國步漸く艱難にして、人民の運命は樂天のものでなく、國家は古

昔の繁榮を復へす由がない。

十四世紀の中頃、ローマは少數の貴族の掌中に歸した。此バロンと呼ばる
る貴族共は、人民の權利等といふ事は毛頭その眼中に置かない。バロンの中最
も勢力のあつたのは、オルシニ並にコロンナの兩家で、此兩家が勢力爭ひを事
として居る。互に強い武士を抱へ込み、城を構へて、絶えず睨み合つてゐる
といふ有樣であつたが、之を抑へる眞正の政府がないから、彼等は益々增長し
て、平民の怖い者恐しい者となつた。商家は世間と雖も店を開く事が出來ぬ。
開けば武士が來て物を奪ふ。商人は荷を送る事が出來ぬ。積み出せば武士が
出て奪つてしまう。殊に悲酸なのは婦人と子供であつて、街上の鬪爭の傍杖
を喰ふばかりでなく、殘酷な無法者の犧牲になる事が、屢々であつた。

爾くローマの時態は急であつた。平民は何人か現れて平和と安全を克復し
て呉れまいかと切望してゐた。されど奈何にせんローマ法王の權力さへ無視

されてゐる。法王は當時アビーニョンの市に蒙塵するの餘儀なきを見た位で
ある。

國亡びんとして英雄起ると曰ふ。英雄は果して起つた。此處に平民から出
て、生長すると共に高い野心に胸打漲つた一青年がある。彼は具に平民の
塗炭を見、奈何にもして其復讐をしよう、ローマ昔時の自由と繁榮を恢復し
ようと夜も晝も其に思ひを碎く。此願望は或日の事、其家族の中に起つた悲
む可き椿事によつて、白熱のやうに燃え上つたのである。彼の弟なる金髪嫩
かな小兒が、往來で喧々と遊むでゐると、オルシニ家に屬する騎馬武者の一
隊が疾風の如く馳け付けた。彼等は其處でコロンナの武士に出會つて、例の
通りの恐ろしい鬪爭を始め、傍にゐた頑是ない男の子を無慙にも踏殺してし
まつて、然も此慘劇を演出した若い貴族は、一言の挨拶もなく立去つたので
ある。

此の時から、リエンジは――リエンジとは此青年の名である――平民が活動するやうに其間を說き廻つた。彼が火のやうなその熱誠、その雄辯、又正當なる主張は、彼の周圍に多數の人々を引寄せた。竟には彼の旗下に平民の全部が名を列ねて、立つてパロンを打つの信號、打つて自由を取戻すの機會を今や晩しと待つやうになつた。彼が平民を愛した故に、平民は彼を愛してゐた。彼等は此指導者と共にとあらば、何處までも行く。彼にならば如何な名稱をも捧げるに躊躇しないのだ。けれどもリエンジは、往時人民を指導した保民官の時代を忍びて、單に、保民官といふ稱號を受けた。斯して彼が日夜の祈願は、此トリビユンの名を辱かしめぬやうといふ一事にあつた。

愛弟慘死の後、リエンジの愛情は一人の妹イレネに集注した。イレネは年十八、美しい少女である。兄が彼女を愛するにも劣らず、彼女も兄を愛してゐた。物靜かな夕暮、此兄と妹が野路を散歩してゐる。此所を描かば、立派な繪

が出來よう。黑髮長く、空想の夢に耽るやうな眼光の丈夫と、金髮輝いて微笑ゆたけく、內に日の光を盛つて作られたやうな生々した乙女、此が相携へて行く春の野が、繪にならずして何としよう。リエンジは眞に空想家であつた、若し世が平穩であるならば、身は花守となつて埋れたい願ひ、進むて天下の事に當る等は思ひもよらぬ、靜かに書を讀み時に河の邊でも逍遙するの外、彼は何事をも願はなかつたに相違ない。而して彼には空想家特有の性質があつた。即ち餘りに人を信じ過ぎた。之は彼の長所であると共に、少くとも斯くの如き思ひ切つた事業の主動者としては、相應しからぬ性格であつた。之は此物語の進むにつれて追々現れて來る悲しい事實である。

或日イレネは漫歩をしてゐて、圖らずもオルシニ家の一公子に見染められたのだ。しかしながらリエンジの妹とあつて見れば、貴族の階級にある彼が結婚の申込を爲した所で、情なく撥付けられるは必定の事、そんな藝の無

い事をしようより、手取り早い方法をと、彼は夜陰に乘じて、イレネを奪去る計畫をした、無論これは大それた惡事である。然も此種の惡事が常に効を奏したのを見ても、當時の世が如何に無法であつたかゞ分るであらう。

それで或晴の夜に武裝をした一隊がリエンジとイレネの住む家の陰に忍び寄つた。彼等は無論リエンジが演説に出た後、イレネ孤獨の時を窺つて來たのである。手早く繩梯子を窓に掛けて一同内へ闖入して、力なき少女を捉へた。イレネは狂氣のやうになつて抵抗し、頻りに救助を呼むだけれど、纖弱い婦女の身の何うする事も出來ず、見す〳〵梯子傳ひに抱き下され、將に連れ去られようとした所へ、運よくも一事件が出來した。そはコロンナの紋章をつけた若者が、從者の一群を率ゐて此處に差しかゝつた事である。彼等は夜目にも物陰の武士を昔ながらの仇敵オルシニの徒黨と認めて、時を移さず打つて蒐る。不意の事であるから、オルシニ勢も驚いたが、勇敢に應戰した。

その物音を聞きつけて人々が馳け集つた頃には、コロンナ勢の首領は氣を失つてゐるイレネを救つて、危い丸の下を潜り、安全の場所に移して置いた。

此騷動に引付けられて集つた人々の中にローマ法王からの大使がゐた。彼は群集の中から進み出て鬪爭を止むるやうに求めた。既に法律を無視してゐるのだから、理窟はいはずに唯宗教及教會の名に依て格鬪を中止して呉れと求めた。然し貴族共は只其僧侶を罵るのみである、若し其時「止めよ」と叫ぶ嚴かな聲が何處からか響かなかつたなら、尙ほ鬪爭は續いたのに相違ない。

聲の主はリエンジであつた。彼は居合せた平民に向つては法律を尊ぶ可き旨を命じ、同時に貴族達には靜かに引取る事を願つた。平民は彼を喝采した、けれども貴族は此平民の指導者に對して肩を聳かして嗤笑つた。そして尙ほ構はずに勝負を決する積りであつたが、リエンジの周圍にゐる平民は非常な大人數だつたので、彼等は思直して劍を鞘に納めた。しかし鬪爭は終つたの

てない、明日の朝再び市の門外で會合するといふ約束をして、各々館に歸つたのである。

貴族共の姿が見えなくなるかならぬに、平民はリエンジを取卷いて、かねての計畫を實行するのは今である――貴族に一大打擊を加へて、市の自由を取返すのは今――今が好機會であると迫つた。リエンジも時機の熟したのを承知してゐた。聞けば貴族等は明朝再び總出になつて市の門外で戰ふといふ。明朝彼等の戰鬪酣なる時、ローマの門を閉したら如何であらう。そして彼等が法律遵奉の誓約を爲すまで、市内に入らせなかつたら如何であらう。

一般群集の意向が自分と同一なのを認めて、リエンジは喜むで彼等の言を容れた。そして熱誠なる一場の演說をして、自分の命令通りに行動するやう、七丘の古市の自由の爲めに、皆々一心同體となつて、力を協せ、貴族を打つことを求め、その計略を一同に示した。翌朝彼の旗が翻る筈である。彼の喇

叭は響く筈である。喇叭が鳴つたらば、此處にある全ての人よ、其隣り人よ、自由と平和の旗の下に、何を棄てゝも集まつてくれ、と彼は言ひ了つて大空の星を見上げた。

群集の喝采は潮の涌くが如くであつた。一人殘らず彼の旗下に働くの誓約を爲した。それでリエンジは群集が散じた後で、始めて此騷動の原因を知つたやうな次第であつた。救はれたといふのが我妹である事が分つた。此時彼女は既に正氣に返つて、今し戸口に凭りかゝつてゐる。そして其傍には彼女を衛り顏の若者が一人。

『おゝ、イレネ、アドリアン君！』

とリエンジは今更驚いたやうな聲で呼びかけた。

『兄さん、もう大丈夫です。けれども此お方が來て下さらなかつたら、私は今頃如何してゐるでせう。オルシニの人が家へ上つて來て、私を連れて行

かうとした所へ、此お方がお出になつて私は助かつたのです。何卒兄さんからもお禮を申上げて下さい。』

『アドリアン君、感謝する、感謝する。非常なお世話になつた。』

コロンナのアドリアンはリエンジの竹馬の友であるが、政治上の關係と階級の相違は長い間二人を隔離してゐた。打ち解けたリエンジの挨拶に、アドリアンは顏を赤らめて笑つた。そしてお禮は却つて痛み入る、實は妹御が苦められてゐるとは氣付かぬ中に、鬪爭が始まつたので少なからず心痛したと云つて、胸に手を當て、慇懃に一揖した。

リエンジは心中大に困惑した。アドリアンは今しがたの演說を聞いたであらう。聞いた以上は自分の計略も悉く承知してゐるだらう。さうすると折角の計畫が土臺から崩れると慮つた。しかしながら彼は直ちに萬事を此貴族の仁俠に待つの決心をして、彼が此宵耳にした事は、友誼上ゆめ〳〵他に漏ら

してくれ給ふなと願つた、これといふもリエンジはアドリアンの品性を能く承知してゐたからである。

アドリアンは一寸ためらつた。先に貴族達はリエンジを嘲笑したが、內實は彼の恐る可き實力を信じきつてゐた。事一言アドリアンの口から漏るれば、彼等は即刻警戒するであらう。あゝ如何したものだらうかと彼は逡巡したのである。

リエンジは此躊躇を見て、斯う附加へた。

『斯くお願ひするのは、私一個の爲めでない、又平民だけの爲めでもない。ローマ全體の爲め——祖先の懷しい記念を殘す此ローマ全體の爲め切にお願ひ申すのです。昔の政府と其光榮、其を再び復起させねばローマは亡びてしまう。國家の爲めに切に賴むのだから、其處を聞分けてくれ給へ。』

するとインネも臆しながら口を添へた。

『私からも是非お聞上げを願ひます。御親切の爲され序てに、何卒此一事は御承知を願ひます。』

『それでは承知します。國の爲め、貴嬢の爲めに。』

とアドリアンは覓に承知したのである。

イレネは顏を赤くした。其眼の中に踊る喜悅の光を匿す事が出來なかつた。若い貴族は此光を見て、今迄經驗した事のないやうな胸の動悸を感じた。そして若し此處へ來る度に斯うした美しい眼の光を浴せかけられるなら、最早何も要らぬ、私が持つ家も土地も爵位も全て要らぬといふやうな氣になつた。

* * * * * * * * * *

翌朝は早くから、ローマの市は曾て見た事のない程の大活躍をした。貴族等は貴族等で、昨夜交換した約束通り、郎黨を引連れて城外の原野に集まる、

その間にリエンジと其徒黨は戰鬪の準備を取急ぐ。武裝した人々が彼方此方を走つて市民に言葉を掛ける。言葉を掛けられると、商人も職工も手の物を棄てゝ武裝を爲し、直ちに其隊に加はる。

日が全く昇つた時、ラッパの音が響き渡つた。リエンジは義勇兵を召集してゐるのである。やがて軍隊の重い進行の足音が四方の街頭から聞え、昨夜の誓約に從つて、義勇軍はリエンジの許に集まつて來た。彼は保民官の華やかな甲冑に身を固め、此軍勢の眞先に馬を打せるのだ。そして議事堂の前の廣い四辻まで來て、彼は人々に要求する所があつた。即ち今日は大膽な行動を取る可き事。愛するローマ市の自由と名譽の爲め、將た又各自の安寧の爲め、一度立つた以上は決して動かぬ事を求めたのである。かくて其々命令を與へ、或者は門を守り、或者は城壁に登つて見張番を爲し、此處で貴族の歸りを待つ事となつた。

勝利は極めて容易に獲られた、貴族共は既に早朝から仲間同志の戰鬪で勞れ切つてゐる。然るに門は堅く閉され城壁は嚴重に衞られてゐるのだから、如何する事も出來ない。彼等は和睦を約するの外はなかつた。そこて爾後は法律を遵守し、リエンジを保民官として仰ぐ旨を誓つて、漸く門内に入れて貰つたのである。

戰はずして敗れたのだから、素より平民を嘲り、其指導者を輕蔑してゐた貴族共は業を煮やした。しかし多勢に無勢だから力づくて行つても到底駄目と見極めて、彼等は表面リエンジの權力を承認し、密に奸策を廻らしたのである。今まて狂暴を逞うしてゐた貴族達が、急に然う溫順になる譯はない。

それて數日の後、リエンジが第一回の公衆應接をやつた時、外國の大使、其他の高官と共に、貴族等は應接室に詰めかけてゐた。それは王の朝廷にも相應しい壯大の集會てあつた。使の者彼方此方に奔走する。給仕は大勢侍つ

てゐる。取次役は保民官に用事のある人を一々取次する。早打は埃だらけになつて、今日の吉報を瞬時も早く傳へようと走り込む。或は盜賊の鎭定、或は交通の安全、或は平和と秩序が國中到る處に行き渡つたので、衆庶は新保民官の政治を喜びてゐるといふやうな、何れも祝賀す可き報告。

政治所は歡喜して此等の報告を發表する。獨り喜ばないのは貴族の連中のみてある。此盛大な有樣によつて、彼等は自家の頭上に落ちた致命の打擊を痛切に感じた。そして保民官が政權を握つてゐる限りは、平民の力に對抗は困難な事を認め、如何かしてリエンジを除かねばならぬ、如何なる高價を拂つても之を斷行しようと一決した。それて彼等は某所に集まつて、尙ほ種々と手筈を定めた。今はオルシニもコロンナも棄て難き古の怨恨を棄てゝ、協力し一致した。

アドリアンも其席に列つた一人て、彼は誓約を破るのは武士にあるまじき

事と同族の反省を求めたが、誰も取合つてくれない。彼の父はコロンナ家の大殿である。此老貴族が却つてアドリアンを責めて、子たるものが親を棄てゝ敵に就くか、同族に背中を向くる氣かといふ、すると熱烈の語が若者の唇まで上つたが、彼は此を堪へて唯國家の安寧靜謐を第一とせねばならぬといつた。何人も相手にしない。一同は各々短刀を呑むでリエンジを探しに行つた。

そんな事とは知らずリエンジは議事堂の廊下から、下に集まつてゐる人民に向つて施政の方針を說明してゐると、突然アドリアンが廊下の柱の後から飛ぶやうに走つて來て、斯う耳打ちした。

『御用心なさい。刺客が參りますから。』

アドリアンは直ぐに走り去つた。もう其時には謀叛者の一群は背後に迫つてゐたので、これ以上を通ずる餘地がなかつたのである。彼等は新政府に關して質問があるといふのを口實に、リエンジを取卷き、手早く短刀を拔いて、代

り〳〵彼を突いた。

然しながら新保民官はなか〳〵用心深い。かねて斯ういふ事があるだらうと慮り、保民官の制服の下に、鎖衣を纏つてゐたから、突いた劍は悉く外れてしまつた。

下から此凶行を見た人民は承知しない。忽ち、

『捉へろ、殺せ〳〵、卑怯者。』

といふ聲が四方から響いた。そして瞬く間に廊下は怒り猛る人民で一杯になり、ッエッコーといふ鬼をあざむくやうな鍛冶屋が指揮者となり、謀叛人の武器を奪取り、忽に縛つて了つた。それから各々を別々の牢屋へ投り込んだ。人民黨の激昂は甚しいもので、彼等を八つ裂きにしても飽き足らぬやうな勢ひ、牢の戸が閉された時、貴族共は却つて安堵の胸を撫で下した位であつた。

事態斯くの如くて、貴族共の運命はもう定まつたやうなものである。人民

はリエンジの座に浪の如く押寄せて來り、貴族を悉く死刑に處せよと願ふ。リエンジも均しく怒つてゐる。自分の身に迫つた危險は兎に角、貴族が誓約を無視した事、並に一般の安寧秩序を顧みない事を憤つて居る。彼等は萬人の幸福を犧牲としても自家の利益を計るのだから、寧ろ人民の要求を容れた方が新しい自由の爲てあらうと思つた。それて彼は人民の言ふ所に從つて、死刑宣告書に署名しようとしてゐると、其處へアドリアンとイレネが入つて來た。

アドリアンは父及び他の貴族の危急を自覺した。彼の計畫が破れゝば、死刑は定つた事てあると信じてゐたが、何とかして、骨肉と朋友を助けたいと思ひ、彼は先づイレネの許に馳せつけて、下獄者の爲め、特に命乞をしてくれるやうにと頼むだ。少女は承知して、早速今二人此處に哀願に出たのてある。二人はリエンジの前に跪いて、ひたすら慈悲を求める。

リエンジは情に脆い人てある。此種の歎願を斥けるの勇氣を持たぬのてある。彼は今しがた署名する積りてゐた宣告書を唯譯もなく裂いてしまつた。そして人民を集めて、貴族達を宥してやつてくれるやう、危害を被つたのは自己一人てあるから、此一度だけは堪へてくれるやうと例の雄辯て請ひ求めた。無論多少の不平はあつたが、人々は保民官の願望を容れて、今度だけは兎に角宥す事となつた。それて貴族等は即刻リエンジの面前に引出された。

彼等は始めて恐懼の體、犯した罪は能く承知してゐる。死刑の宣告の外、何物をも豫期してゐない。若し彼等の一人がリエンジと地位を代へたなら、彼は直樣其宣告を下したに相違ないのだ。然しながらリエンジの主なる缺點は前にも述べた通り、他人の約束に信用を置き過ぎる事て、之が今彼の一生の錯誤を釀したのてある。彼は懇切且つ寛容な態度て斯く申渡した。

『友よ、諸君が事を起して累紲の身となつたのは自分の深く悲む所てある。

自分は命を露惜しまぬ。國の爲めならば何時でも喜むで捧げる。しかしながら先刻の襲撃は自分の見る所によれば、自分一個の身の上に行つたのでなくて、國家に加へた危害だと認める外はない。諸君は誓約を蹂躙した。若し法律と人民の要求にのみ從ふならば、諸君は時を移さず死刑の執行を受く可き筈である。諸君の罪は正に之に價する。然しながら神聖なる教會の教訓には、慈悲を以て互の惡行を忍べとある。それで自分は激昂してゐる人民に、諸君の爲めに命乞ひをした。若し諸君が誓約を新たにし、人民の法律と其代表者としての自分の權威を尊敬する旨、紳士として又耶蘇教徒としての名譽に誓つて、茲で約束するならば、諸君に對して別段の取はからひをする事が出來る。』

貴族共は互に顏を見合せた。且つ驚いたのである。こんな事は嘗て聞いた經驗がない。「人を殺せ、然らざれば殺さる可し」といふ主義の下に生活して

來た彼等は呆れざるを得なかつた。然も頑冥なる彼等は、此若い空想家の寛仁大度に感激する事もなく、誓約は今の場合、唯一の血路だと思つて、不承不承に署名した。

保民官の蒔いた親切の種は良い果を結ばなかつた。唯狼を野に放つの行爲に外ならなかつた。貴族等は自由を得るや否や、齒を露出して其獰惡の本性を現はした。茲に至つては人民も其指導者の分別を疑はずにはゐられなくなる。

貴族等は其夜こつそりと市を脱出した。そして翌朝になると、彼等が大軍を率ゐて、リエンジを討つために、ローマを取圍むといふ報知が屆いた。方々から集まる報告を綜合して見ると、貴族來襲の報告は確な事實である。人民は大に怖れを爲し、公然とリエンジの不明を非難した。とは云へ彼等は尙ほリエンジを棄てる事はない、矢張り彼等を導いて、恐る可き敵手からローマ

の市を救ふべき唯一の人と頼つてゐた。

リエンジは驚いた樣子もなく、常の如く晴々しい顏付をしてゐる。彼の態度には識らず〳〵の間に周圍の人の信用を惹起す魔力がある。そして彼の辯舌は例の通り、人民を旗下に寄せ集め、國の爲めには我が血は最後の滴までも流すといふ決心をさせた。

さはれ此多端の時に際して、少からず心緒を亂した者がある。憐む可し、アドリアンは去就を決し兼てゐる、何れに赴く可きかに迷つてゐるのだ。若し親に孝、同族に信ならんには、彼は貴族勢に投ぜねばならぬ。若し新しく彼の心の中に芽を萠した愛國心並にリエンジの友情に背かじとならば、彼は無論人民と伍を共にするの外はない、しかのみならずイレネに對する彼の戀情は日々に募つた。イレネにも彼を此上なく思つてゐる風が見える。眞に進退窮に谷るといふ場合、斯くする間も戰爭の時は刻々と迫つて來る。

遂に貴族方の軍勢は堂々と市に攻寄せ、門際近く陣取つて降伏を勸めた。門衛が之を罵り歸す。兎角して內からは歌の聲と武器の音が頻りに漏れる。リエンジの軍は一歩も退かじと勇みを爲し、盛んなる鬨の聲を作りながら門に近づいた。リエンジは眞先に乘つてゐる。彼が黑味勝の眼は輝いてゐる。やがて彼が門を開いて敵に當るの命令を發しようとする時、アドリアンは忽ち躍り出て、リエンジが馬前に身を投げかけた。

『待つて下さい、何卒待つて下さい。保民官！』

と彼は呼んだ。保民官の馬は後退をした。リエンジは手綱を堅く把つて、

『如何したのか。』

と嚴かに言放つた。

『私は行つて貴族と今一度交渉して見ようと思ひます。或は私のいふ所を容れてくれるかも知れません。さうなれば戰はないでも濟みます。和睦をし

たら如何でせう。』

『アドリアン君、もう晩い、晩い、彼奴等のいふ事は決して信用出來ない。さあ、其處を退いて。こら、門衛、門を開いて宜しい。賣る戰爭なら充分買つてやらねばならない。』

門は開かれた。可憐なアドリアンは横さまに押し退けられた。兩軍は直ちに突進して入り亂れた。昔から激しい戰鬪の行はれたローマも、此時程激しい血の雨を味つた事はあるまい。貴族は憎惡と貪慾に驅られて打つ。平民は自由の爲めに打つ。リエンジの黑馬は其處に顯はれるかと思ふと直ぐに此處に見える。神出鬼沒、背に勝ち誇つた將軍を乘せて、劍戟の相打つ最も激しい巷を驅け廻る。リエンジが黑髮に戴く兜上の白羽毛は勝利の記章である。リエンジの淸い聲は刺戟である。征服である。

凄まじい流血の後、貴族勢は竟に破れて逃げ失せた。保民官は再び貴族に

捷つたのである。重なり合つた死骸の中にはアドリアンの父、コロンナ家の大殿が首もあつた。勝つた市民は屍を片付けて、將軍頌捷の歌を唱ひ、リエンジを神のやうに崇めた。そして如何にも晴れやかな日の光が、明日からはローマの空に臨むやうに見えた。

貴族等は斯く大敗して退いたが、暗鬪は未だ〳〵止まぬ。今や彼等は隱密に奸手段を運らし、其目的を遂げようとした。當時獨逸の皇帝は名義上國權をローマにまで及ぼしてゐた。それで貴族等は此邊の關係を利用して、當今ローマは頗る危險な謀叛人の手に歸してゐると皇帝に傳へ、尙ほアビニョンに法王を訪れて、リエンジは公々然あらゆる權勢を侮る位な恐る可き邪敎徒である、彼儘に捨て置いては、神の名を代表する敎會の威信にかゝはると說付けた。先に法王は貴族の爲めにローマから逃げるやうな仕儀になつたのだが、どういふものか貴族の言葉を信じて、其計略に陷つた。獨逸皇帝も獨逸皇帝

で、美事貴族等の術中に陷り、ローマ駐劄大使召還の命を發した。

此報知がローマに着くと、移り易いは民心、又新たに動搖を起した。或者は今まで崇拜してゐたリエンジを直ちに棄てようとさへした。而して彼等の昏迷は、非望を抱く奸輩――殊に先にも出た鍛冶屋の主人ッエッコーの一派が頻りに流言を放つので、更に激しきを致した。ッエッコー及び其徒黨は、此人心の動搖に乘じて、自家の權勢を逞うする爲め、全ての機會を利用して、群衆の耳を毒するに努めた。

彼れ此れする中に、又一人の主動者が出て來た。其はアドリアン其人に外ならぬ。アドリアンは父の横死を悲むの餘り、必ずリエンジを殪すと誓つて、此惡む可き押領者此恐る可き暴君を打つ爲めに。助勢を人民に哀求した。そして「リエンジ討つ可し、リエンジ討つ可し」の聲は漸く其處此處に起つた。

然しながら、尙ほリエンジの爲めに辯解の勞を取り、彼と進退を共にする

者も少くなかつたので、議論はなか〳〵喧しく、多數の市民は何れのいふところを信ず可きかに迷うたのである。

紛議百出の此騷擾中に寺院の鐘が高く響き渡つた。此は人民を禮拜堂に招く合圖である。そして戰勝の祝賀を兼ねて、感謝祭を行ふといふ布令が出て、法王の大使と其從者が禮拜式に臨むのだ。之を見た人民は又迷つたが、法王が先頃の戰勝を祝するとあるからは、リエンジ破門云々は、根底なき風聞に過ぎなかつたらう、と民心は稍リエンジの方に立歸り始める。

其時恰もリエンジが見えた。彼は妹の手を把つて扶けながら靜々と會堂に進むで來る。アドリアンは群集の中に待つてゐる。彼は自らリエンジを刺すと公言してゐた。群集の中にもリエンジを打てといふ聲がした。けれども何人あつて指一本差す者さへない。彼の沈着いた態度には犯し難い所があつた。それにアドリアンはリエンジがイレネと共に歩いてゐる以上は、到底手を下

す勇氣はない。

イレネの顔は青い。眼には苦惱の跡が明々と見える。彼女は兄の身の安否を氣遣ひ、尙ほさる人の悲哀を思遣つてゐる、若しアドリアンにして彼女の心中を見貫き得たら、此手弱女も彼と同一の煩悶を胸に包むてゐるといふ事が分つたであらう。そして其かなしみの理由を知つたなら、同じく苦しみ且つ喜びだであらう。

リエンジとイレネが會堂の入口に近いた時、群集は恐駭に餘る光景を見た、といふのは法王の大使が正服にいかめしい紋章を輝して現はれ、二人の入場を禁止し、大音にリエンジを呪つた。且つ彼が聖餐に與る事を差止め、尙ほ全て敎會に於ける特權を取上げたのである。そして大使は一般に向ひ、彼を助ける者は皆同じやうな刑罰を被るのだ、心せよと警めた。

此は所謂法王の破門である。基督敎會内に於ては此に勝る罰はない。大惡

人の外には此刑罰を受ける者は先づ無い。

此不正當な思ひもかけぬ言葉を聞いた時、リエンジは躓いた。呆然とした。彼が身も靈も國家に捧げて、大功績を爲した其報酬は、法王からの破門！彼は爲す可き道を知らなかつた。市民は癩病人を見るやうに、恐れてリエンジから遠ざかつた。その間にアドリアンはイレネの傍に驅け寄つた。

『私と一緒に來て下さい。絶交は貴女にまでは及むでゐません。私は貴女の安全を計ります。』

『いゝえ。』

とイレネは兄に摺寄つた。

『いゝえ、兄の行く所なら何處へなりと私は參ります。私は決して兄を棄てませぬ。不幸も危險も共に受ける決心です。』

『けれども貴女は兄さんを保護出來ません。手後れにならぬ中私と一緒に御

出てなさい。』

『いゝえ、何(どう)してもお言葉には從はれません。』

彼女は兄の手を取つた。不幸なる兄妹は靜かに歩み出した。群集は左右に道を分けてやる。そして何か恐ろしい者でも見るやうな顔をする。

不意の打擊に一時は度を失つたものゝ、リエンジは尙ほリエンジたるを失はぬ。彼は信じてゐる——人民の意をさへ得るなら、我が事は必ず成就する。成就の曉には法王に事の眞相を開陳する事が出來る。彼は今や怒るよりは悲むだ。かくて歩みながらローマ市救濟の新計畫に思ひを凝す。

『議事堂へ行かう。彼處には演壇がある。行つて一の演說をしよう。』

『いゝえ、兄さん。それよりは逃げる方が安心です。ローマといふ所は恩を知らない市です。もう此上盡す義理もありますまい。一刻も早く私は此市の門外(もんと)に出たい。』

とイレネは涙ながらに言つた。

『よく考へなくては困る。今逃げれば罪ないわが罪を自認する事になる。それに逃げるといつて行く所はない。ローマは私が戀人だ——生命だ。ローマを外にしては私の生涯は無意義だ。若し詮方なくば自分はローマの爲めに生命を棄てる。自分が死んでローマが榮えるなら、喜むでローマの爲めに生命を捧げる。』

イレネは頭(かうべ)を振つた。しかし何もいはなかつた。默つたなり、二人は議事堂に近づき、其廣い石段を登る。兩側の番兵は保民官に敬禮を拂つた。堂內に入つて彼は傳令使に命令を與へ、さて廣間へ歩んで、心ゆく計り神に祈つた。しかし自分の爲(ため)の祈禱(いのり)ではない。愛するローマの爲めに祈つたのである。

さはれローマは如何に彼を遇してゐるか。破門の風說は遼原の火の如く市

内に廣まつた。市民に非常な反情を惹起さした。衆人の口は他事を談らぬ。ツェッコーと其黨與は、之を利用してリエンジの罪を數へ、生かして置くのは市の爲めに危險だと吹聽した。

人格の力は必ず人を打つ。アドリアンは既に前非を悔いたので、いかにして保民官の爲めに、民心の潮流を盛り返へさうと、百方手を盡したけれど、今は全く無効であつた。彼が先に發したリエンジ呪詛の語は、其儘人民が口から迸る。その間にツェッコーの部下は益々人數を增し、保民官が議事堂に匿れたと聞いて、「リエンジ討つ可し」の聲は息はしくも「議事堂に火をかけよ」といふ叫に變つた。

竟にアドリアンは最も大膽なる行動のみリエンジを救ひ得ると見た、即ち直ちに踪跡を暗ますの外、保民官に取つては安全の策がないと知つたのである。彼は一目散に議事堂に奔つた。イレネは兄の室を護つて其の戸口に

立つてゐる、

『兄さんは何處ですか。早く逃げなくてはいけません。暴徒は議事堂を燒きに參ります。兄さんは何處ですか。』

イレネは室を指さして、

『此處に。』

といふ。そして然も悲痛に堪へ兼ねたやうに、

『けれど兄さんは逃げなさりますまい。私も兄と共に死ぬ積りです』

と附加へる。アドリアンは其處に撞と坐つた。

『あゝ、イレネさん、貴女には私の心が分りませんか。貴女を愛してゐる——初めてお目にかゝつた時から、貴女を慕うてゐるこの胸は、今は裂けるばかりです。何卒か何もいはずに私と一緒に逃げて下さい。此から二人で兄さんを說きませう。けれども若し兄さんが御承知ないなら、貴女は犧牲に

なるに及びません。』

と彼はイレネの返答をも待たずに、室に驅け入つた。見ればリエンジは跪坐したまゝ、頻りに祈つてゐる。

『さあ早く逃げて下さい。もう暴徒は間もなく此處へ來て火をつけます。若し私に身を委せて、此處を落延びないなら、貴下も妹御も死なねばなりません。そら、街頭の物音が聞えませんか。もう來たのだ。』

鯨波は追々と高くなる。最早暴民は手近く迫つたのであらう。けれどもリエンジは微笑したばかりである。

『人民には能く慣れてゐるから、私は心配はないが――イレネ、此處はお前の止る所でない。今から私の友アドリアン君と一緒に行つて呉れ。』

『それは先刻から願つてゐる事です。あゝ神さま、此不幸な時にも私は彼女に對する愛を棄てません。何處までも彼女を保護致します。さあ、私は誓

つて、妹御の幸福を遂げます。リエンジさん、私の心は此通りです。』

『イレネ、お前はアドリアン君を愛してゐるか。』

イレネは唯うなづいたばかり、そして兄の手を握つて潸然とばかりに泣く。

『それでは二人で行つて呉れ』

とリエンジはイレネの手をアドリアンの手の中に置いて、

『必ず添ひ遂げて呉れよ、私にも戀がある。私が戀の相手はローマだ。お前方は二人何處までも離れてはならぬ。私もローマとは離れない。さあ、早く行け。仲よく暮らして呉れよ。』

時は迫つた。暴徒の先驅は既に四辻まで押寄せた。リエンジと最後の握手を交はして、アドリアンは氣を失つてゐるイレネを抱いて立上つた。暗い廊下を降りて、乘ねて承知の密道から、彼は事なく逃れ出た。

けれどもリエンジは如何なつた？最後まで其主義に忠信なる、剛毅なる保

民官は、二階の露臺に現れ出た。其處で彼は人民に向ひ、最後の演說をする積りであつた。けれどもツエッコーの徒は此を許さぬ。彼の雄辯は人民の心を如何變へるかも計られない。それで彼等は罵る、叫ぶ、石を投げる。あらゆる妨害を試みた。その間に一部の暴徒は演壇の下を始めとし、建物の各部に火をつけた。やがて煙が昇る。次いで焔が見える。煙は恐ろしい光景を暫時匿したが、再び騰る數條の火舌、わつと叫ぶ鬨の聲。リエンジは兩手を揚げて、未だ人民を說く積りで、煙の中に立つて、ゐる。寸地も動かぬ。あゝ、此熱血兒！彼は國の爲めに殉する外、何事も知らんのである。

恐ろしい音を立てゝ、議事堂の四壁は倒れた。此建物の墜落は嫐て政府の墜落である。人民は此日の事を世の終までも悔いて止まぬ。火の粉が吹雪のやうに一度天に昇つたかと思ふと、更に渦捲く黃煙の上に降りて來た。あゝ、此が最後の保民官リエンジの墓であつた。

幽霊船

船！船は奇すしいものである。錨を下して動かぬ時、之を望み見ては、種々の事を思起すであらう。遠い岸邊の物語を傳へ、更に遙かの外國の、耳新しい消息を齎す船！其が廣い白帆を張つた時は、無生の物とは思はれない。波に浮寢の夢から覺めて、やをら長途の旅に就かうとするに、さも生命ある物に似ぬであらうか。さて是が動き出して、昔からの仇敵——海も何かはと、船底の現はなるまで。白帆傾いて突き行く時、何人か、その雄々しさ美くしさを讃へぬものがあらう。

世始まつて以來、若干あらぬ間に船を操つる術が進歩した。板子一枚其下は地獄といふ、其地獄の浪を能く先あ今日まで、漕ぎ分けて來たかと思へば、船に對する歎賞の念は更に深くなる。彼等は地の極を窮めた、四海の民を隣

同志の間柄と爲し、熱帶の果物を溫帶の穀類と交換させた。蒸氣の利用以前は舟と云へば皆現在のまゝの帆前船、それが人類の勞役の爲めに然く忙しかつたのだが、今後とても彼等は海の業が行はれる限り、尙ほ尙ほ人間の爲めに盡すことであらう。

船乘は其昔から船乘として、特殊の一社會を成してゐた、彼等には特殊の生活、習慣、信仰がある。彼等は吉日凶日、前兆、雲、鳥、風等を信じてゐた。全然風と浪の自由になるのだから、斯く迷信深いのも敢て怪しむに足らない。その中でも特に海には惡靈があつて、此惡靈は航海者に危害を加へ、激しい風波を送り、且つ彼等を海の底深く引込むものと信じてゐる。惡靈は水も漏らぬ船を容易く沈めてしまう。奇妙な光を見せて恐ろしい岩礁に誘ふ。彼の怒は眞に恐ろしい。次の物語は或不幸な航海者の上に祟つた惡靈の一例である。

一昔時ファンデルデッケンといふオランダの一船長が、精選の船員を連れて、南の海に行つた。彼は數月間所々の港で貿易を爲し、大分利益を占めた。船が深く波間に隱れる程、其荷倉は黃金で滿ち溢れてゐた。その中にファンデルデッケンは航海に飽きてしまつて、陸地が戀しくなつた。金に絲目をつけず、好い家を買つて、愛らしい妻君を貰つて、平和な家庭の生活をして見たくなつた。それで彼は滿帆に風を吹かせて歸途に就いた——早く喜望峯を廻りたい、早く故國オランダに着きたい、そして此船乘の足を洗ひたい、と其のみ急ぐのであつた。

喜望峯とは名ばかりだと航海者が能くいふ。全くファンデルデッケンに取つては喜望峯は名に相應しからぬ難所であつた。恐ろしい暴風が起つて、その船を正面に吹く、船は何時までも同じ所に漂ふ。再三此風を乘切らうとしたが、効はなかつた。竟に彼は腹を立て、どうしても此岬を廻つて見せる、世

の終までかゝつても必ず乘切つて見せると言葉荒く誓つた。

悪靈は之を聞いた。そして氣味の悪い微笑を洩らした。彼は此船長を其誓つた通りに、世の終まで波浪の上に漂はせる決心をした。それで先づ船員全體に魅入り、彼等を死なしめず、又船を沈ませぬ事とした。それからといふものは年が年中、彼等は海を漂ひ廻る。そして如何に焦つても目的地に達し得ない。船は追々古びて蟲が喰つたが、水は一滴も洩らぬ。帆は魔の力で舊の通りてあるが、鮮血の色を帶びてゐる。今や長年月の苦勞で、古枯び、皺だらけになつた影うすい船員共の心臓から、生命の血汐が絞り出されてかく染めたかと思へば、なか〳〵に氣味の悪い色である。彼等は寧ろ死を望むだが、駄目であつた。帆を張つて風に逆らつて見ても船は覆らぬ。岩礁に突當つて見ても碎けぬ。唯々航海を續けねばならんのである。然しながら彼等には一縷の希望がある。彼等の船長——彼だけは舊の通り若い、決して老ない——

その船長ファンデルデッケンが眞に彼を愛して死ぬまで貞節を守るといふ女を得た曉には、彼等一同の呪詛は直ちに解けるといふ悪靈からの約束てある。それて船長は七年に一度づゝ上陸を許された。けれども妻になる女を見付け得ないから、彼は其都度可厭な船に戻つて來て又可厭な航海を續けねばならなかつた。

幾度も彼は己を救つてくれる人を求めたが、甲斐なかつた。彼の見慣れぬ風采と其幽靈船の物語は、何人をも逡巡させる。彼が現れると娘といふ娘は慄へてしまう。彼等が父母兄弟は、赤い帆の船が見えたらば、氣をつけろよと豫て申付けて置く。多くの船が暴風の折、屢々此幽靈船に行合ふ。此船が着いた所には、後日必ず何か災害が起る。暴風の最中に斯々いふ船に合つたと航海者は怖れ戰いて語る——非常な浪の中を平然として幽靈船が近づく、言葉をかけて、此處は何處かと問ふ。海圖も羅針盤もなくて困るといふ。そし

て故郷に手紙を言づかつてくれ、此包を持つて行つてくれと頼み、返辭も待たずに、古風の水夫がボートを下して近づく。風は強い浪は高い。電光が絶えず閃く。其の氣味の惡い事――と顏を皺める。手紙を頼まれた航海者は、餘儀なく宛名の所へ持つて行く。既に幽靈から事を托されるのが不運である。といつて長く身邊に持つてゐては、尙怪〳〵氣味が惡い。破り棄てたら祟られて、什麼不幸に陷るかも知れぬ。それて是非とも配達の勞を執つてやる。ところが宛名の人は決して見當らない。寺て聞いても役場て尋ねても、二百年ばかり前に其に似寄つた名の人があつたと答へる。時には三百年前に過去帳に其人がある。浦島ならぬ浦島の子か、航海者は驚き呆れ恐れざるを得ない。

* * * * * * *

時に北海に激しい暴風が荒れ凉むだ。之を避ける爲めに、或ノールエーの船は、風を背にして、最寄の港に走り込み、錨を下した。此船の船長は骨格逞

しい人、今や故郷が近くなり、一人娘が待ち佗びてゐるのに、斯ういふ仕儀だから、頗る苛々してゐた。彼は名をダランドといふ。娘の名はセンタ、早く母親に死別れて、今は乳母と二人て留守をしてゐる。眼は漆黑の溫雅な少女て、其生活が淋しいものだけに、物思ひに耽り勝ちの、父には極く從順で、何ても父の命令通になつてゐる。

ダランドは惡人てはなかつたが、よくない癖があつた。それは唯金が欲しいといふ慾で、彼一生の願望は金持になりたいといふ事にあつた。彼が長い航海を爲し、多くの危險を冒すのも、皆是が動機になつてゐる。しかしながら口先ては藏をも建て得るといふ諺の通り、事實はなか〳〵金は溜らないので、彼は常に不滿足てあつた。

彼が最後の航海は失敗てあつた。度々暴風に出遇つて、沈沒を防ぐ爲めに、據なく船荷を投棄てた事が二度もあつた。そして今故國から四十哩といふ所

て、又々暴風に妨げられ、用もない港に逃込むといふ始末である。眞に運が悪い。けれども兎に角事に慣れた水夫共だけに、彼等は此避難中の時間を最も良く利用しようとした。そこで船長は部下に休息を命じ、船の操舵車に一人の見張を置いて自分も眠つた。

雷雨の時よくあるやうに、空氣は惡く重い。そして黑雲が恐ろしい勢で空を走る。けれども灣内に入つて見ると水は比較的靜かで、船の碇泊には別條困難ない。小波が絶えず調戯ひ、四邊が急に靜かになつたのだから、番人は操舵車に凭れかゝつたまゝ、ウト〳〵してゐる。そして竟に睡つてしまつた。

彼が斯く睡つてゐる間に、沖邊では又しも暴風が起り、先よりも凄まじい勢で荒れ勝るよゝと見る間に、天から落ちたか浪から涌いたか、それとも疾風の齒から吹き出されたか、船が一艘港を指して驀地に進むで來た。浪は兩舷に躍りかゝつて、今しも船體を呑み去らうとする。けれども不思議な事には、其

船員共は驚き狽てる素振も見せぬ。唯時に拳を揚げて空を打ち、暴風も何かはといつたやうな態度を示す。尙ほ奇怪なのは船員共の心得である。據なくば檣柱を倒しても然る可き此風の中に、帆といふ帆は悉く張つて、快晴無風の日、油の上を走るやうな艤裝をしてゐる。そして其帆の色は何れも血紅色である。

船はダランドの船に並むで止つた。そして漸く帆を捲き錨を下したかと思ふと、ボートを下して、船長が飛乘るより早く、岸へ漕ぎ寄せた。船長は妙な風體の男でゐる。髮は房々と長く、眉太く、兩眼には急促の性を見せてゐる。長い航海にも拘らず、彼の皮膚は淸らかで、何處となく打ち悄れた風が見え、其が非常に人の心を惹く力があつて、美くしい容貌である。彼の部下は皆老人である。あれて能くボートが漕げると思ふ位瘠せ衰へてゐる。

ボートが岸に着くと、船長は一と安心といふやうに、溜息を洩らして上陸

した。彼の歩調は妙である。長い間甲板の上ばかり歩いてゐた面影を遺憾なく留めてゐる。彼は其處に突出てゐた岩に凭りかゝつて之を抱き占めた。久しぶりて土を踏むだ嬉しさに耐へ兼ねたのであらう。次いて彼は其上に登つて、陸地の方を見渡した。

『あゝ七年間』と彼は呟いた。『七年間の長の船路！嬉しい。再び陸地を踏むのだ。此可厭な航海は何時止むのだらう。何時海と絶縁が出來るのだらう。』

此は例のオランダ人である。惡靈の呪詛を解く爲めに、妻になる婦人を探しに七年ぶりて又上陸して來たのである。稍久しかつた彼の沈思は、『おい、船長！』といふ聞慣れぬ聲て破られた。

ダランドは睡眠から覺めて、甲板に出て見ると、番人は能く寢てゐる、奇怪な黑船が手近に錨を下してゐる。彼は驚きもし、腹も立てた。けれども其

船長が岸にゐるのに氣付いて、今斯く喇叭を用ゐて呼びかけたのである。

『君は何處から來たのかねえ。』

岩の上の人が振り返つたので、彼は斯く附加へた。オランダ人は唯々手を振つて、うなづいて見せた。肉聲では到底屆かぬと承知してゐるらしい。其樣子が何とはなしにダランドの好奇心を動かしたので、彼は早速ボートを命じて陸地に漕がせた。

『私はダランドといつて、ノールエーの船長ですが、貴下は何處から御出でしたか、お名前は何と仰有るか。』

『私はオランダ人で、前に一度此處に上陸してから今迄、世界中を回つて居ます。』

『上陸しては御愉快でせう。私も久しぶりて土を踏むて嬉しい。隨分酷い目に遇ひましたよ。貴下も暴風に遇ひましたか。』

オランダ人は微笑むだ。遇つた所が、暴風は彼の常住である。

『暴風ばかりでした。けれど私の船は何んな暴風にも平氣です。』

『何をお積みですかな。』

とダランドは自分の不幸な經驗を想起して尋ねた。

『重いものばかりです。金や銀、それに寶石を取引してゐましたから。』

金と銀、それに寶石と聞いて、ダランドは眼を丸くした。

『それぢや迂濶と投荷も出來ますまい。』

『けれど金銀より貴いものがあります。もつと大切なものが世にはある。陸地で靜かに生活出來るなら、私は財產を悉皆棄てゝも構ひません。』

『私は又私で陸地を棄てゝ金の爲めに航海してゐます。世は樣々ですなあ。』

とダランドがいつた。今度はファンデルデッケンが、耳を欹てた。

『お住所は此近所ですか。』

『はい、次の岬を廻れば直ぐです。茅屋ながら一軒構へて、酒も澤山仕込むであります。暴風さへなければ、最早今頃は着いてゐませうに。』

『けれど此暴風が貴下の幸福になるかも知れません。眞正に金が欲しいならですよ。全く然うです。』

『何と仰有いますか』。

『斯うです。陸地に生活出來れば、持つてゐる金を悉皆捧げると私は只今申しました。私は眞面目で然ういふのです。私は家庭の生活がして見たい。私は上陸中貴下の家の客になれますまいか、然う出來れば私は貴下を金持にして上げます。』

『眞正ですか。』

耳よりな話だと思つて、ダランドはオランダ人の顏を見つめた。

『嘘を申してもつまりません。何なら前金でお拂ひしても差支ありません。』

と譯もなく言放つて、ファンデルデッケンは其船員に向つて呼子を鳴らし、大聲を揚げて何か命令した。何處の國の言葉か少しも分らぬ。すると其に答へて五六の船員が船藏に馳下りて、重さうな箱を持ち出した。そしてボートに乘せて、早速岸邊に漕ぎ寄せた。船長は其場で内容を開けた。

うづ高き黄金や寶石、ダランドの眼は輝いた。かゝる富は彼は未だ夢にも見た事がないのである。彼の指は早速掴むで見る事を禁じ得なかつた。そして如何にも驚いたやうに、深い溜息を吐いた。

『大したものですな。貴下程幸福な人は此世に又とありますまい。』

『幸福？』

とオランダ人が反問した。

『心に切望の寶がないならば、此富は何の益にも立ちません。家庭がない、妻がない、親族さへない。何の幸福な事がありませう。長の年月私は一人で

漂つてゐる。もう倦き〳〵してゐる。そして自分の求めるものは、決して與へられないといふ、能く〳〵因果に生き續けてゐるのです。』

と彼は然も侮蔑したやうに、金庫に向つて爪彈きした。ダランドは惡人ではないだけに、心の底から此言語に感じた。そして慰める氣になつて、

『兎に角私の家へ御出て下さい。報酬等は兎も角として、一緒に食卓に就き一つ家根の下で眠りませう。何もお構ひ申す事は出來ませんが、娘が料理をしますし、給仕も致させます。』

『それでも貴下は娘さんがございますか、お何歳ですか。』

とオランダ人はなか〳〵氣が早い。

『丁度年頃になりましたが、親から見ると何時も子供としか思へません。自慢ではムいませんが、器量好しだと近所の評判です。幸福な事には孝行者て、私のいふ事は能く聽きます。』

此處てファンテルデッケンは其娘を呉れるなら、此金庫は此儘差上げる。御意向は如何と、いとも熱心に相手の手を握つたまゝ申込むだ。

ダランドは此不思議な船長の顔をシゲ〳〵と眺めてゐたが、其恰好のいゝ顔付と威嚴ある風采が、甚だしく彼の心を惹き付けた。それて同意者の態度になつて、

『私の一人娘てすが、何とか致しませう。貴下の物惜しみをしないので、貴下の親切と氣高い心が分ります。全く貴下が養子になつて下されば、實に願つたり叶つたりて、貴下の富が其程てないとしても、私は矢張り貴下の外に人を求めません。』

此言葉を聞くと共に、漂泊船長の顔には得もいへぬ喜悅の笑が上つた。そも此は何年ぶりの笑ひ顔てあらう。太陽も彼に同情を寄せるが如く、今し西の空の雲間から現はれた。風は死し、水は靜かに、天候は回復したやうてある。

『御覽なさい、とう〳〵天氣が上りました。』

『上々吉です。私共は直ぐに出發しませう。今出かければ日沒までには家に着きます。船に歸つて御一緒に錨を上げませう。』

『私は帆を少し直しますから、貴下は一足お先に願ひます。直ぐに後から追付きますから。』

オランダ人は斯くいつて、後から行く積りてある。日のある中に港に入りたくない。入れば赤い帆が見えるだらう。赤い血色の帆は其地の人の注意を惹かずにはゐまい、と彼は思つたのてある。

『それては然ういふ事と致しませう。』

とダランドは承知して、直ぐに船に歸り、帆を揚げた。船は微風を受けながら、港を出て行く。水夫共は間もなく家に着くのだから、唯譯もなく躍り狂ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夕暮父の船が港に近づいた時、センタは家にあつて、五六の快活な饒舌な女友達に取圍まれてゐた。ノールエイには面白い風習がある。少女は友を訪問する時、絲繰車を携へて行く。是は談笑すると共に仕事の手を休めず、時間を無駄に潰すまいといふ考へてある。それで此友達も且つは語り、且つは絲を繰つた。しかし此日は什麼いふものか、センタは打沈むてゐる。彼女の手は時々前垂の上に休む、彼女の眼は屢々物もない空間に漂ふ。斯う坐つて物思に沈むてゐる態は、美しい繪畫てある。何の幻影を見るか黑い眼は艶に輝いてゐる。豐かな色澤が其ふつくりとした頰に上る。

『あら、センタさんは又考へてゐるのね。』

と入つて來た乳母兼家婦のマリヤがいつた。

『お客さんを打棄つて置いて、考へ事は可けません。今お父さんがお歸りに

なつたら如何ですか。もつと濕としてゐないと、笑はれますよ。』

センタは顏を赤らめて笑つた。そして氣が付いたやうに絲を手にした。他の娘達は笑ひながら斯麼事をいつた。

『ばあや、幽靈船の歌を歌つて上げると可い。センタさんは幽靈船の船長の事を思つていらつしやるのよ。先刻から最早一時間も彼の繪ばかり見ていらつしやるのだもの。』

眞に此室の壁には彼の漂泊の船長の似顏らしい古い繪が張り付けてある、ダランドは旅から歸る時は、何時も何か彼と種々樣々したものを土產に持つて來る。此繪もその中にあつた物てある。

乳母は幽靈船の歌を承知してゐるので、座興を助ける積りて一同に歌つて聞かせた。此種の物語が最も能くセンタの好奇心を惹くのてある。

『不思議てすわね、眞正に愛してくれる人がない爲めに、何時までも航海し

てゐるつて、可愛さうな船長ぢやありませんか。何處の娘さん達も皆然う
した不實なものでせうか。』
とセンタは獨言のやうにいつた。
『あら、センタさん、何處の娘さん達もは些と手きびしいわ。私達だけは兎
に角不實者ぢやない積りよ。』
と一人の娘が憤慨した。そして、
『けれども七年に一度しか上陸しないといふ人の所へなんか、お嫁に行けよ
うもないぢやありませんか。』
『それに百年も二百年も生きるといふのですから、奥さんが死ねば又吃と貰
ひましよう。何人も好き好むで其樣な人の許へ行くものはありませんわ。』
と又一人が調子を合せた。けれどもセンタは動かぬ。
『いえ〳〵、それは貴女方が眞正に心の底から愛を捧げないからです。』

『けれど愛を捧げるといつても、先方が幽靈ぢや仕方ないぢやありません
か。幽靈に愛は捧げられません。』
『私は捧げられると思ひます。若し私て出來る事なら、私は喜ひて此心を
捧げます。』
とセンタは眼を輝かして言放つた。
『あら、センタさん、あなたは如何なすつたの？』
と皆は一聲に呆れて叫むだ。そして、
『あなたはイリックさんを萬一お忘れぢやありますまい。』
と一人が附加へた。
イリックは山に住む若い狩人で、センタを慕つてゐる。センタの方でも、
幼少からの友達だから、惡くは思ふ筈がない。さりながら全てを彼に捧げる
といふ程ではなかつた。

『忘れはしませんが、イリックさんはイリックさんで、幽靈船の船長ぢやありません。』

『幽靈船の船長て堪るものか。』

と大きな聲を立てゝ入つて來たのは、今嚮に上つたイリックである。

『一體どうしたのだい、センタさん。氣を付けて話をしないと私は嫉妬を燒くよ。』

と彼は快く笑つて、一同に目禮し、さて

『今日はセンタさんを喜ばせる積りで馳けて來たのだよ。お父さんの船が丁度今岬に差しかゝつた所だから、最早間もなくお歸りになるだらう。それからお父さんの船の後に尙一艘船が見える。屹とお客さんを連れて來なさるのだらうから、はあやにいつて早く支度をさせたら好からう。』

センタは雀躍して手を拍つた。待ちに待つた父の安着、家中は急に色めい

て、絲繰車は他へ除けられ、娘達もお手傳ひ甲斐々々しく、長テーブルを室の中央に出すやら、大騷動である。稍あつて皆は各自絲繰車を手にして、後にセンタとイリックを殘したまゝ、歸つて行つた。

『センタさん、先刻幽靈船の船長の話があつたが、彼は何だね。』

とイリックが早速問ふ。

『唯可愛さうだといつてゐたのよ。何時までも獨身で海に漂ふのだから、可愛さうだといつたのよ。』

とセンタは然もないやうに答へる。

『それぢや私の獨身は可愛さうぢやないのかね。』

と男は搦むて見る。

『お前さんは別です。若くて丈夫て……そして、今歸つて行つた娘さん達は何人てもお前さんを好いてゐますわ、けれども彼の船長は何人も愛して

くれないので、世の終まで海にゐるといふのだから、全く可愛さうだと思ふのです。』

『センタさん、冗談は止してお呉れ、然し無暗に幽靈の加勢をしなくたつて可いぢやないか。そんな事をいはれると、益々氣になつて困るよ。』

『何が其樣に氣になるの。』

『何がつて、僕は昨夜惡い夢を見た。餘り眞正らしかつたので、其を今日は一日氣にしてゐるのさ。』

『それぢや幽靈船の夢でも見たの。』

『幽靈船の船長の夢さ。お前のお父さんが歸つて來て、それも妙な知らぬ人を連れて歸つて來てさ、その男といふのが又何處の誰か、唯金持だといふばかりで分らない。背の高い痩せぎすの顏の靑白い、髮は黑々房々と長くて、如何にも熱情ありさうな眼付の男だつたよ。それが來ると直ぐにお前

さんの顏ばかり見てゐる。何時までも見てゐて眼を離さない。そして竟にはお前さんに結婚の申込をしたのさ。』

『そして私が承知したの？』

とセンタは呼吸を止めて尋ねる。

『左樣だ、センタさん、お前さんが直ぐに承知して私を棄てゝ其男と一緒に行つてしまつたのさ。僕は待つてくれと海岸まで追かけたが、其男はお前さんを船に乘せて、赤い帆を揚げた。お前さんは例のオランダの船長と一緒に行つてしまつた。僕が何程呼んでも何程呼んでも……』

『駄目でしたか？』

『いや聲が出なかつたんだよ』

『夢だわね。けれど其が私の運命ぢやないかと思ふ。』

『センタさん、お前は本氣で其樣な事をいふのか。』

とイリックは殆んど前後を忘却して絶叫した。そして尙ほ耐へ難ねたのか、其儘外へ飛出した。

センタは獨りて沈思してゐると、戸が開いて、父が入つて來た。見れば見しらぬ人を連れてゐる、センタは夢てはあるまいかと思つた。父と同伴の男の顏は、イリックの只今話した通り、寧ろ壁に張つてある畫其儘てある。彼が彼女の顏に眼を注いだ時、此は幽靈船の船長、漂泊のオランダ人に外ならないと彼女は本能的に覺つた。

父を迎へる爲めに飛立つた彼女は父の肩に顏を隱して、涙に咽むだ。ダランドは娘を接吻し、其頰を撫てた。

『遲者て結構だ。今度は待遠だつたらう。俺も待遠かつた。けれども お前は如何したものだ。未だお客樣に御挨拶も申上げないて。』

センタは此の時には少しく己れに歸つて、來客に向つて一揖した。しかし

其は冷かな努めてした挨拶てあつた。實は彼女は故意と斯くの如き擧動を爲したのてある。什麼いふものか、彼女はオランダ人を一目見ると、直ぐにも駈け付けて、手を取りたいやうな心持になつたのてある。』

けれども父は思つた——彼女は冷淡てある。一應自分から詫き、且つ例の金庫の事も話して見ねばなるまい。愚かな老船長は何でも黃金て量る。今や娘の愛情をも黃金て量る積りてゐる。しかし此は彼女の心を能く解してゐない仕打てある。

それて、夕飯の支度最中、ファンデルデッケンが設けの室て着物を着更へなどしてゐる間を見計らつて、ダランドは娘を招き、客人の事に就いて知つてゐるだけを打明けた。彼の係累なき漂泊人な事、非常に有福て、今や家庭を持つのを唯一の希望としてゐる事等を述べて、斯う結むだ。

『客分として置いて呉れろといふから承知して、お前に結婚の申込を爲る許

可を與へて置いた。無論恁ういふ事はお前の量見一つで定るのだが、平常の通り、お父さんのいふ通りにするか、それとも彼の人の許へ嫁くのは不承知かな。』

『お父さん、私は自分で彼の方に御返事致しませう。彼の方が何れくらゐ私を欲しがつてゐるか、其を彼の方のお口から聞いての上で、御返事を致しませう。』

ダランドは此れ位の所で、一先づ手を引いた。けれども娘の言葉つきには頗る意を強うするに足るものがあつたので、彼は敢て強ひず、ファンデルデッケンとした所が、樣子も好いし、馬鹿ではなし、早晩纏まるだらうと思つて成行に委せる事としたのである。

夕食の卓上には、主人が頻りに諧謔を弄するにも拘らず、聊か双方控目の樣子が見えた。センタは喜びて父の航海の物語に耳を傾けなかつたてはな

い。又絶えず父の身の上を慮つた質問を發しなかつたてはないが、客は其漂泊に就いて問はれる毎に、體よく遁げる。そして自ら愉快らしく粧ふけれども、長い間斯ういふ席に出た事がないので、始終手持不沙汰の態が明白と見えた。

兎に角夕飯は終つた。ダランドは今夜別に用があるといふのを口實に、二人を殘して出て行つた。

すると間もなく、娘は客が自分の方へ靜かに歩み寄つたので、胸を轟かした。

『センタさん。』

と彼は先づ名を呼むだ。其聲には威嚴と哀求が含まれてゐる。

『センタさん、此方をお向き下さい。』

センタは顏を揚げて、ファンデルデッケンを見た。二人の視線は衝突したが、

センタは臆せず男の顔を見まもつた。眼の働作は機敏である。兩人は彼等の心の間に今は何も垣がない、二人は相愛してゐると各自見て取つた。

『センタさん。』

と彼は彼女の手を把つて、

『私は御覽の通り、飾りのない荒くれた航海者です。それでお氣に召すやうな言葉は使へませんが、胸にある事だけを申上げたい。先程お目にかゝつた時から、私は貴女を愛してゐます。そしてお父さまも私の結婚の申込を許してゐなさる。私は貴女の眼を讀み違へてゐるか如何か、御遠慮なく御返事を願ひます。』

『御一緒になるのは運命だと私は思つてゐます。』

センタは事もなく斯う答へたのである。

船長は身を顫はして喜むだ。彼は愛されたのである。惡靈の紐から遁れる

のも近い中である。同時に彼は自分の申出の大膽なのに驚いた。自分は呪詛を受けてゐる。此罪もない乙女に、其呪詛を分擔してくれと願ふとは、大それた事だと思つた。

『待つて下さい。』

と彼は彼女の手を放した。

『私は貴女に御約束を願ふ權利がない。貴女は私の身の上を御承知ですか。』

周圍を輝かすやうな微笑がセンタの顔に上つた。

『はい、能く存じて居ります。』

『それでは御存じなのですか。私は呪はれた世界の漂泊者ですよ。』

『然うです。何も彼も承知してゐます。』

『人は私を見ると怖れて遁げるのです。何人も私を相手にしてくれないのです。』

『けれども此れからは二人ですから事情が違ひませう。』

『手早く申せば、私は呪詛の身です。まあお待ちなさい。』

と男は女の物をいはうとするのを制して、

『まあお聞き下さい。呪詛を受けた身ですから、此から私を送り出して下さい。暗黒は呪はれた者の住家です。只今此呪詛から免れたいばかりに、貴女に結婚の申込をしたのは、私の私慾から出た誤謬です。悪靈は世の終り迄迷ふやうに私を呪ひました。此呪詛は眞實な婦人、死ぬまで貞節な妻を持てば解ける約束ですが、若し妻が不眞實だと妻にまでも及ぶのが、又約束なのです。お目にかゝる前から、私はお父さんに願つて、自分の私慾の爲めに貴女を犧牲にする氣でゐました。そして如何に重大な事を貴女にお願ひ申してゐるか、唯の今まで氣が付かずにゐました。全く私慾であつた。謝罪します。容して下さい。今のお話は此場限りとして下さい。さあ、何

卒此れから私を舊の暗黒に送り出して下さい。貴女のやうな仁俠のある方にお會ひ申したのを、せめてもの慰藉として長く忘れぬ積りです。』

『それでは貴下は私をお愛し下さらぬのですか。』

とセンタは尋ねた。

『愛さないのではない。愛せばこそ、貴女に此犧牲を願ひ兼ねるのです。』

と、ファンデルデッケンの顏には血の氣がない。胸中の苦悶は最高潮に達したのである。

『私の御返事は斯うなのです。能くお聽き下さい。私の手は此の通り貴下に委せます。私の心は唯今から貴下に捧げます。そして死ぬまで渝らぬ誓を立てます。』

『それでは心を捧げて下さる、死ぬまで渝らぬと誓ふ？のーでーすーか。』

とファンデルデッケンは言了つて、さながら見えざる敵を空中に打つやうに

拳を揮つて、

『今の言葉が聞えたか。お、惡靈！ファンデルデッケンは最早自由の身だ。』と叫び、其處に膝をついたまゝ、センタの手を幾度となく己が唇に當てた。

其處へ丁度ダランドが歸つて來た。此有樣を見て、局面の一轉に狂喜した。二人の將來を祝福して、彼は斯ういつた。

『私は明日船員一同を饗宴に招ぎませう。そして貴下の御許可を得て、其場で婚約の披露を致しませう。』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌朝は朗かな日和、ノールエーの船の上は非常に賑はしく活氣を呈してゐる。水夫達は大旗小旗を飾つて、市の人の來訪や饗宴の支度にせはしい。凡ては物音と笑ひ聲と歌ばかり、彼等は待ちに待つた長休暇の來た學生のやう

であつた。

之に反して、オランダの船の上は肅然とした事寂然墓場のやうである。甲板の上には動いてゐる影も見えぬ。唯船長上陸中といふ證の旗が翻つてゐるばかり。

すると娘連の一群が岸邊へやつて來た。彼等の多くは前日センタの家で知合になつた顏である。彼等は水夫に贈る爲めに、果物や菓子の籠を掌げて來た。これを見たダランドの船員は倦らずボートを岸邊に寄せた。しかしオランダの船には尙ほ生物のゐるやうな樣子が見えぬ。

『お隣りの船は、彼は一體如何したのです。』

と娘達が尋ねた。

『お隣りは音信不通さ。昨日までは見た事もない船だ。錨を下してから身動もしない。』と水夫が答へた。

『大方皆寢てゐるのでせう。でもまあ寢坊ねえ。起してお上げなさいよ。』

水夫は承つて、

『オーイ、夜が明けたぞう！』

と呼ばつて見たが、音沙汰ない。

『寢坊な奴だ。打棄つて置くさ。來なけれや來ないで、その分此方が頂戴するばかりだ。世話はない。』

『まあ、慾の深い。ねえ。』

と娘達は笑つた。

『彼奴は什麽やら幽靈船に似てゐるぜ。オーイ、そこの黑い船！オランダの船長さんはゐるかやあい。』

と尙一人の水夫が呼むて見た。

此聲に答へるやうに、うすら寒い風が陸に向つて吹き始めた。何とはなし

にゾク〳〵して、見てゐた人々は身の毛が彌立た。すると不思議な事が起つた。港の中は極く靜かだのに、黑船の周圍だけが妙に波立つて、其波が追々と四方に廣がつて行く。終には空まで曇つて、どうやら荒れ模樣になつて來た。そして黑船の甲板に、水夫が見え始めて來ると思ふと、彼等は大急ぎて血の色の帆を張り上げ、悲しげな歌を歌ひ始めた。

無論見物人は驚いた。娘達は蜘蛛の子を散らすやうに逃げてしまひ、隣の船の水夫達は指で十字架の形を畫きながら、怖れ慄へて船底に隱れた。

此有樣を見て幽靈船の水夫達は哄を作つて笑つた。そして荒れさうに見えた空は何時の間にか晴れて、港は又以前の通り穩かになつた。

その時にダランドの家の戸が開いて、センタは海岸に出て來た。イリックが後から追いて來る。無論センタの決心を翻す爲めに今一度口說く積りである。夢が其通りの事實となり、センタの口から愛想づかしを聞かうとは、ど

う考へても信じられない。彼は子供の時からの二人の關係を述べて、今一度考へ直してくれと訴へた。

『どうしてもお前は私の妻だ。子供の時からお前も其積りてゐたのぢやないか。それを今私を棄てゝ、見ず知らずの人と如何あつても一緒に行く積りかい。』

『イリックさん、考へ違ひをしちゃ困るよ。』

とセンタは稍鋭くいつたが、彼の悲しむ態が、目に餘つたので、また慰めてやる氣になつた。彼女は幼少の時からの友達が斯く歎いて、自分を惡く思ふのを默視出來なかつたのである。

けれどもファンデルデッケンは二人の態度を見て誤解した。彼はセンタが最早昨夜の誓約を悔いてゐると思つた。そして其は全く有理の事、自分は到底海を漂ふのが運命だと觀念して、遽かに波打岸に走つて、本船に歸る爲め、

ボートに手をかけた。

センタは其と見て直ぐに驅け寄つて、

『どうなさるのてすか?』

『私は最早行く。約束は始めから無理なのだから、私の方て解きます。然うしないとお前さんは私と同一の呪詛を受けねばなりません。』

『だから私は約束を守つてゐます。貴下を愛してゐます。何處へなりと御一緒に參る決心をしてゐます。』

『これセンタさん、お前はまあ何をいふのだ。彼の船は呪はれた船だつて皆がいふぢやないか。』

とイリックはセンタを抱き止めた。

『呪はれだつて構ひません。一緒に行かなくては。』

と彼女は跪いた。けれどもイリックは放さない。

『全く其方のいふ通りです。』

と船長は稍や落付いた樣子で、

『全く私は呪はれてゐる。幽靈船といへば何人でも慄へて逃げます。御約束は更めて私の方から棄てますから、此てお別れに致しませう。』

と言ひ了つてボートに乘移つた。

センタは何うしても船長を救はねばならぬ。一緒に行かねばならぬと蹠く。

『いや、私こそお前さんを救はなければならぬ。』

と船長は此を名殘に、黑船の方に漕ぎ寄つた。

再び荒れ始めた海を、幽靈船は出て行つた。岸ではセンタが驅け廻つて呼むてゐる。イリックは頻りに取押へんとして追ふ。丁度ダランドも出て來て、漸くの事、捉へた。幽靈船は最早大分沖へ出た。

一心に船を見つめてゐたセンタは、急に父とイリックを振もぎつて、海岸續きに船を追ひ始めた。石を越え、岩を越えて、女の一念恐ろしく、その速いのには、ダランドもイリックも追つき兼ねたが、引續いて走つて、竟に岬の絶壁まで來た。船は今し此處を廻つて大海に出る。

センタは絶壁の上に立つて、下を通る船を呼むだ。イリックは攀ぢ上りながら、頻りにセンタの名を呼むだ。

センタは返辭をせぬ。船首に姿を見せたファンデルデッケンに向つて、彼は斯ういつた。

『私は何處までもお伴致します。死ぬまで御約束を守ります。』

其言葉が終るか終らぬ間に、彼女は身を躍らして荒海に投じた。

虹色の氣が空に上るよと見る間に、怪なりとも怪なり、浪は直ちに治まつて、幽靈船の姿は最早再び見る事が出來なかつた。

センタは死んだ。ファンデルデッケンの呪詛は解けた。そして幽靈船は今日も未だ海の底に沈むでゐるのであらう。

歌客、タンホイゼル

基督教の世に擴ッてから、古代の男神女神を信ずるものが跡を斷つに到つた。それ等の神々は悉く邪鬼、妖精だと考へる、人によッては左樣の神なぞは元來世に居らんのだと公言するものもあるやうになッた。かゝる時勢になッても、まだ世に現存するものとして、恐れ忌まれた一體の女神があッた。これは『愛』の女神のヴェヌスである。ヴェヌスは其通力の廣大なるが爲めに諸方の國民から尊崇せられたのである。誰人か戀愛と云ふ痛切な情に動かぬものがあらう、愛は此の世の盡きるまで人心を左右して行くのだ。それで古代、ヴェヌスの神と云へば、萬人が等しく渴仰する。彼女も諸々の神のうち、特に情ある神で信者に幸福を下し與へ、信者相互の關係の圓滿ならんことを計ッたのであつたが、後代は左樣でない、人は彼女を忌み恐れるのみである

から、彼女も亦その復讐として、出來る限り人を苦しめる、美しい潔い愛の代りに、利己的な、嫉妬、爭擾を起させるやうな、醜惡の愛を以て人の胸を搔き惱ますのであッた。軈てヴェヌスは自ら妖女と變じ、獨乙のヴェヌス山と云ふに籠り、兎ある岩窟に住居ッて通行人を蠱す業を始めた。一度彼女が妖術に捕はれたものは、終生この山を出ることが出來ない、家を忘れ、愛する妻子を忘れ、過し方を想ひ出すことさへ適はず、一向にその奴隷となり、そがなす儘の體になッてしまうのだ。日も月も星も空も、野の草の新の綠も捕虜の眼には映ぜぬ。たゞ薔薇色の薄い光が、種々の美しい雲と、氣懈い名も知れぬ花の薫に閉される中に、己を忘れて、そこに舞ひ狂ひ笑ひ興ずる少女の群に現を拔かすのである。

一日ヴェヌスが洞窟近くに見張をして居ると、山路を此方に一人の武士が上ッて來る、若き世の力に張り滿ちた秀麗な人品であるが、見る所、意氣消

沈し、快々として歩む。ヴェヌスは元來人の心を讀むこと掌を指すよりも容易であるから、彼の武士は如何云ふ男で何處から來たのかは一目にして覺ッて終ッた。然し讀者に對し一應筆を轉じてその人の來歷を語らう。

此の青年の武士、名をタンホイゼルと呼ばれ、生國をトュリンギアと云ふ。此頃數多の漂浪詩人があッて非常の人氣を負うたものだ。それで戰鬪に從事する武士中にも、刀槍々棄て武藝の試合を外にして、浮身を競歌に窶すものが多ッた、トュリンギアの國王も此風流を嗜まれ、居城ヴァルトブルグに度々競歌會の催しをなされたが、此の競技に勝ちたる人の聲譽は一通りのものでなかッた。タンホイゼルは此等名人歌客中隨一の名譽人として知られて居た。彼は幼きより樂音を理會り、競歌の初舞臺には忽ち數個の懸賞を奪ッて、老手を後へに瞠若たらしめたのであッた。彼が琴、彼が聲には不思議な魔力があッて怪しく聞く人を引きつける。國王の姪なるエリザベス姫はタンホイゼルに戀

して御座すとは早くから噂に立ッて居た。

然しタンホイゼルは此を幸福とは思はぬ。彼は姫を愛しわが音樂を愛し、二ッの愛に足はぬものはない筈であるが何やら不足を感ずる。世の名譽と云ひ快樂と稱するものは彼に取ッて力が微弱である。言ひ更ふれば彼は未だ達し得ぬ何物かに憬がれて居た、けれどもそれが何であるかは自分にも解らぬ。

遂に彼はエリザベス姫や諸々の友人に訣別し、唯遠地に旅するとのみ云ひ殘して鄕土を離れた、心は決めたものゝ去る時は流石に悲しかッた。されば二重の悲愁を抱いて提琴を負ひたる樂人は、今此所の山路を上るのである。

見つめる洞窟の戸は忽然として開き、微暗い門口に立てる美人は此方に對ッて兩手を擴げた。背には洞内を溢れる薔薇色の光を曇に此の世の人とも思はれぬ。女は即ち妖婆ヴェヌスで、タンホイゼルを蠱惑しようとするのだ。怖ろしい魔女が眼は微笑の裏に隱れて比類なき麗人と現はれて居る。今呪文

を誦しながら彼方をさし招き、

『さあお出でなされ、貴郎が不安のお心は迅に妾に知れてゐました、貴郎を御幸福にして上るのは妾ばかりですよ、此所にはお求めの音樂と美が備はッてゐます、さあ、お早く』

と呼びかけられて、タンホイゼルは我を忘れ吸ひ込まれるやうに洞窟に驅け入ッた。洞内に一足踏み入ると重い戸が後に閉ぢる音がして、同時に此までの記憶が夢のやうになッてしまう。彼は瞬く間にヴェヌスが奴隷となり終ッたのである。妖婦はその手を執ッて不可思議の領土深く導くのだが、歩一歩、驚嘆と歡喜が湧いて來る。梢搖る風の音は心蕩ける合奏と聞え、碧水湛へる湖の波は岸長閑かに愛の歌を響かす。水面かなたに白く動くは一群の仙媛、近き水際には雅びた仙童や人魚の擬戰を戲れるのもある。

タンホイゼルは此所に始めて眞の美と幸福を索め當てたと思ッた。嘻々と

してその女王に仕へる一年の月日は一瞬と短かく過ぎる。其間彼は悉く以前の生活を忘却して、唯現在に生き、時の間の歡樂に溺れたのであッた。

けれ共遂に變化が起ッた。何とは解らぬ何物か胸に蠢めいて『汝は奴隷だ！』と囁き罵る。心付いて己を顧れば、自分は魔力の捕虜となッて、爲めにわが日頃渇望の事を悉く放擲して居る。タンホイゼルは今や口默し、心落居ぬ樣である。眼敏いヴェヌスは當人が心付くよりも早く此を觀破いて居た。さはさせじと日に新奇な快樂を設ける。舞蹈、演劇、狂言、活人畫に次ぐに宴會、擬戰と一寸の考へる閑もおかせぬ、殊にその音樂演奏會は人の世に類ないものであッた。しかしヴェヌスが策略は効を奏せない。

一日彼が沈欝のさまも失せて、些か陽氣に浮き立つて居る時、ヴェヌスは一曲の歌を求めた。彼は請はれるがまゝに「愛の神」が讃美に言葉の限りを謠つた。調べは長く續いて、仙境に於ける諸々の風光嬌態を數へ終はると、

奈何しけんタンホイゼルが憧憬の想ひは次の歌詞となッて流れ出て、己れ自らを驚かしたのである。

得てん、われ、わが自由をぞ
あらずは死よ、何ぞも生きて、
自由には、なにかためらう。

薔薇色の洞に今われ、
こがるゝは森の微風
青空の麗しき眺めや
百鳥の歌古き世のさま。

行かんいざ、生や死や何！

くるしみを世の喜びを
人皆と嘗めんいざわれ、
奴とは、はやも眠らじ、
去なせよ、われを、あはれ女の神。

所有、手段も効果なく、去なせよ、自由を與へよと面と對ッたこの請求に、ヴェヌスは勃然腹を立てたが、色には見せず和かに云ふ、

『どこへ行きたいと仰せる？、此の領土こそ足らぬものもなく備ッてゐるのに。貴郎は何を一體望むのでせう。それを打ち開けて下さい。直に適へて上げますから』

タンホイゼルは獨言くやうに

『自由が欲しいのだ、唯自由が……』

『自由とは何のことです、貴郎は今何處へ行くことが出來る體ですか、お見

捨なされた、その古い世界は迅に貴郎を忘れてゐますよ。貴郎は此所にさへ居れば不老不死、で何もかもわがものと自由では御座いませぬか』

タンホイゼルは尚も意地を張る、

『それでも拙者は去りたい、どこと云ふ的はないのですが。どうぞ拙者を許して、これよりも違ふ生活、今胸に湧き起る新の希望に適うたやうな生活を求めさして戴きたい、拙者は決して貴女を忘れは致さぬ、貴女ならぬ、他人には讃歌を捧げぬ覺悟ですが、唯々、此の所を放ち遣ッて戴きたい』

『では勝手になさい！』

ヴェヌスは、怒氣を含んで云ひ放ッた。

『恩知らずの人間は此所に用はありませぬ。然し、よく妾が忠言をお忘れなさるな。貴郎はこの領土に滯在した爲め、外の社會に立場がなくなッて居ます。此所に居たことが他人に知れると相手にする人はないのですよ。何時

か又あなたは妾が領土に歸ッて來ます。しかも自分と進んで、では其時まで……』

と叫んで地團太を踏むかと見たが、廻舞臺のやうに景色が變ッて、今ある洞窟は忽然と消える、氣怠い薫も、薄暗い光も、そが中に踊り狂ふ美人の姿も、一時に失せて身は青草の丘に横ッて居る。上には際涯のない大空、日光は赫々と頭上を射るのだ。タンホイゼルは熟睡から覺めた人のやうに手足を伸ばし清淨な空氣を長く深く吸ッて見た。それから遠い谷々に眼を走らせると、過去の生涯が判然ともの新らしく浮び出る、それが唯昨日のやう。

彼方にヴァルトブルグの高い城砦が聳え立つ。彼が競歌會に半生の名聲を博した城である、恩義深い王の居城である、更らに美姫エリザベスが微笑傾けて彼を迎へた所である。今やエリザベスが姿の浮び出ると共に胸が堪へえぬ痛苦を覺えた。姫は奈何なされたのであらう。姫に對して濟まぬ擧動に出て

ゝから幾何の月日が經ッたのであらう。

丘より遠からず、牧人が無心に蘆笛を弄んで居た。羊の一群が傍にさも樂しく草を食んで居た。牧人は軈て笛の手をとゞめ、羊を呼び集へて靜かに谷間を下る。新しい草原を索めるのであらう。

此時遙かの山路より大衆の唱へる歌が聞えた。漸々近づいて歌の聲も明晰となる、――羅馬に巡禮する一隊の人が路上唱へる哀れな美しい讃美歌であッた。その懺悔の歌詞が耳に達した時、タンホイゼルは始めて義理の道を離れ走ッた己が罪の重さを覺ッたのである。悔恨の遣る瀬なさに彼は路傍の十字架の前に跪坐いて、眞心より罪の宥免を禱ッた。

跪坐いて居る間に今度は別の物音がする、獵犬の賑かな吠聲に雜ッた角笛の急遽しい響である。若干もなくして一隊の獵人を從へた國王の御姿が現はれた。一行此所を過ぎ去る時、王はタンホイゼルなりと見て馬の手綱を止め、

言葉やさしく此まで何處にあッたかを尋ねなさる。タンホイゼルは愁然頭を上げ、

『わが君、私は諸方の國へ罷り越し、志ざす種々の物を尋ねましたが遂に見當りませぬ。どうぞこの儘お見免しを願ひたう御座います』

と云ふ。王は

『それは宜しくない、余は其方が不在の爲め競歌會にも狩獵にも淋しうてならん、少時なりとも余が城に停まつて呉れよ』

と有難ゝ仰せ、隨伴の武士等も王の語に次いで切に停まり給へと口を副へた。實を云へば競歌に打ち敗けた連中には、彼が歸國を面白からず思ふものがないでもなかつた。しかし、タンホイゼルには無二の友で、同じく有名な歌手たる、ウォルフラム、フォン、エッシェンバッハと云ふ武士は進み出てゝ熱心に彼を說く。ウォルフラムは歌曲に於てタンホイゼルが好敵手たるにとゝまら

ず、共にエリザベス姫の愛を競うて居るのだが、この事て久濶の友を歡迎せぬと云ふやうな賤しい心はない。

親友の諫めも聞かず、彼が猶足を止めるに躊躇ふ樣子を見て、ウォルフラムは聲を密め、

『ては申さう、御邊が歸城を俟たるゝ人がもう一人あるのだ。彼方の城中にぢや。一度御邊が面を見ると、其人の眼は輝き其人の唇が笑み崩れようと云ふのだ。實、彼の人は御邊に去られてから見る目も氣の毒に力を落して居る。豫てその美しい姿が花てあッた競歌會も、今は全く寂寥れた。名は云ふにも及ぶまい、御邊とて、よもや、ヴァルトブルグの花の花たるエリザベス姫を忘れはしまい』

姫の名を聞くに身は怪しく打ち戰き、今一度その顏を見たい、面のあたりその人の聲を聞きたい希望は、痛恨の思と共に互もゝ胸を刺すのであッた。彼

は溢れる涙の眼を彼方の丘陵に向けた、城砦は上る朝日に照り渡ッて居る。今は言葉なくて、唯承諾の意を點頭くと、ウォルフラム は其手を執ッて立ち上る。王は『來れ』と仰せられ、供奉の武士諸共其儘馬の頭を反された。かくして漂浪の歌客を伴ひ御氣色斜ならず凱旋の時の樣に揚々として歸城せられた。

* * * * * *

其夜は恰も競歌の例會であッて、歌客の名簿は以前より作られてあッたが、特にタンホイゼルの名を其中に加へよとの王命である。エリザベス姫は王の一行が城に歸ッた頃には姿も見せなかつたが、タンホイゼルの戻ッたと云ふを聞くと、嘻々として競歌會の出席を約される、今宵は例にない盛會の模樣となつた。

薄暮、賓客のまだ集まらぬ前に、姫は大樂堂に行ッて自ら諸々の準備をなされた。此所に一刻も早く愛する歌客の見えるかと云ふ懸念があッたので。

彼女は五月の空のやうに美しい。眼には深空の碧を湛へ、黄金の髪和かにそよぎ下る。背丈は寧ろ低い方であるが、楚々たる姿容の中に混る女王の威嚴氣高く、近頃は常に勝れぬ煩の色も、今宵は活々と輝いて見えた。

聽て聞き馴れた足の音が樂堂の一隅より響く。エリザベスは面を上げぬ間に早くもその人と知ッた。

『わが姫、お免し下され！』

といふ聲。タンホイゼルは姫が足下に跪き兩手を擴げて居る。姫は優しくこれを制めて、

『妾に對し左樣なさッては困ります。免すも免さぬもないでムいませんか。唯この年月一體何處に御出でなされたのです？』

タンホイゼルは言葉も跡切れ〳〵に、

『その事は申上げる譯には參りません。拙者は貴女の御所を去ッてから、遠い

〳〵國に憂吟ひ致し、忘却の幕の切れ落ちたのは漸く昨日と今日との間で御座います。その暗い幕の中に、何の思慮分別もムいませなんだが、朧げながら一ッの願が胸中を徘徊したやうで御座います。――どうぞ何時かは再び貴女のお目通が出來、『許す』と云ふ御言葉を聞かねば濟まんと焦心ッ居たことで御座います』

エリザベスは手にて面を掩うたが喜悅の涙は纖い指の間から滴り落ちた。彼はこの樣を見て、己が如何程姫から愛されて居たかを覺ると共に、愚かにもこの貴い眞珠を振り捨てゝ居たことに氣が付く。

姫は戀する婦女の常と、何事をも許すのであッた。最早過ぎ去ッたことは訊ね咎めぬ、右手左手と互る〳〵愛人が手を、心ゆくまで握り合ふ。

王の出御は、和解の、この小舞臺を閉ぢる。王は一瞥にして萬事を了られた。微笑を湛へて進み寄られ、

『余が望み居ッたやうに結構ぢやのう』

とて少時は放たず二人が手を執ッて、

『されば、これからは訝ひは止とし、余が樂人の歌のやうに相和し合うて暮さう』

と仰せられる。タンホイゼルは胸に添けなさの波を打たせて、わが古い生涯は尙われを迎へて居る、ヴエヌスが言葉のやうではないのだと思ッた。て、以後はわが地位と名譽とに背くまい、特にわが身をかくまでに愛される姫には、全心を捧げても慊らずと思ひつめたのである。

程なく鳴り渡る鈴の音は競歌會の近きを報ずる。王と姫とは樂堂の一段高き所に御座を取られる。タンホイゼルは一先づ堂を退く、他の歌客と共に正式に入場しようと云ふのだ。

樂堂は漸次に滿たされる。先づ入ッたのは高貴の人々で、玉座に敬禮して各

椅子に着く。次では武官と賓客。嬢て第二鈴の響きと共に今宵の歌客が進み入ッた。何れも武名高い勳爵士であるが、タンホイゼルの如く劍を捨てゝ提琴を手にする面々。中にウォルフラム、フォン、エッシェンバッハ。ウォルテン、フォンフォーゲル、ヴァイデなどの名手の名は今日にも傳はッて居る。然し彼等の中にはタンホイゼル程の美男もなく、彼程名譽の伶人もなかッたと云ふ。

歌客が會釋して指定の席に着くと、王は立ち上つて皆々の伺候を滿足に思ふと御挨拶があり、更に今宵の歌題は『愛』と云ふのだ、誰人にまれ、この高雅なる題に對し最傑作を賦したものはエリザベス姫の手から賞品を賜はる、しかも賞品には制限をおかぬ、何なりと望むものを與へやう。と特に後の語には力を入れて仰せられた。

歌客の中、姫に想を懸けるものは一にして止まらぬ、此の約束は暗に彼等

が心に潜む最大な希望が指されて居る、然して宣言を聞く一堂の光景を思へ、籤を抽く伶人等が手は先づ震ふ。

第一の籤はウォルフラムに落ちた。水を打つ沈寂の裏に身を挺す彼。

手練の指端に鳴るや絃絲、はじめは低く、しかも朗に謠ひ出づるは私慾なき誠熱の愛、武士の戀てある。ウォルフラムは久しく姫を慕つて居ながら、これをわが友タンホイゼルに讓ると云ふ寛大な人格てあるから、歌にも尙い氣品が現れた。彼はこの歌を宮廷の佳人、そが中にも類なき眞珠と照り渡るエリザベスに捧げたので、聲は次第に音量を增し來る。世には唯一つ眞正の愛が存する、その愛の爲めには自己の身心を犧牲とするに於て、最高至大の歡喜を生ずるのだ、と聽衆の胸に深い尊い印象を刻ませて謠ひ終はッた。

滿堂は喝采の裏に動搖めく、彼が歌は實にも賢こく眞理を穿ッて居た。然るにタンホイゼルは獨り賞贊の聲を出さない。彼は夢見る人の如く默して耳

を歌てたが、かの仙窟の光景が蠱惑を逞うして樂の音と共に再現するのであッた。ヴェヌスが妖艶な姿が隱見く、『あなたの外には讃歌を捧げぬ』と誓ッた己が言葉が耳元に呼く。

樂堂はまだ讃嘆の音に犇く時、タンホイゼルは合破と座を蹶立ち、我を忘れてウォルフラムが歌に答へるのだ。歌の主意は前者と正反對で、自己を犧牲とする清淨な愛を貶して性慾を滿足させる利己の願望を贊するのである。妖女の魔力は再び彼が心を占領したのだ、彼は夢中の人である。

タンホイゼルが歌ひ始めた時一堂は均しく耳を傾けた、然もこの奇怪な趣意が永く謠はれぬ間に、早くも不平不滿の聲に喧しくなッて來た。忽ち一人の歌客は跳り上ッて叫んだ。

『汝は虛妄の愛を歌ッて居る、汝が心のやうに虛妄の愛だ。默ッて、それを聞かれるものか、默ッてそれを聞くのは眞の武士の恥辱だ。其方に決鬪を

申込む！』

其他の歌客も一整に叫び罵るので場内の喧騷甚だしい。王は座を立ッて靜粛を命じた。此時ウォルフラムは再び提琴を手にして、身を起し衆を麾いて歌ひだす。

彼は先づ溫言を以てタンホイゼルが自分勝手な價値ない歌を責め、愛を然く下劣のものと解しては到底その眞義を悟ることが出來ぬと難じ、更に絃絲をかき鳴して、万人が渴仰する純潔な熱誠な愛を贊へる。

するとタンホイゼルは無法にも再び此を遮ッて、聽衆が反抗の呼號を耳にもかけず、わが經驗し來ッたる放恣無慙な生涯を謠ひだすのだ。かの洞窟内の光景、そこの音樂、薫香漲るそこの空合、ヴェヌスが治むる領土に於ける種々の歡樂を數へて、

『卿等が、俠氣をだす戀沙汰は此に比べると、微の生えた、冷くなッた愛の

殘肴と知れ。卿等が崇め奉る世界無双の美人とて、わが說く女神の傍に立ッては、何の顏色かあらう。吁々ヴェヌス！、ヴェヌス！、斯くわが約束を守るを見られよ、わが讃歌は常にヴェヌスが上に捧げる！』

彼は謠ひ終ッて惘然として衝立ッ。現には見えぬ或る光景に恍惚として身動もしない、手を滑る提琴は落ちて床上に鳴ッた。

騷擾は前に倍し、歌客は皆席を蹶立てゝ此方を目がけて走りかゝる。

『彼奴はヴェヌス山に居たんだ、彼奴惡魔に惑まッてるんだ、追ひだせ！、殺せ！』

罵り吼る狀凄まじく、殺しもかねまじき處へ胡蝶の如く閃き下ッたのはエリザベスである。エリザベスはわが歌客の奇怪な歌を心苦しく聞いて居た。われを許した男はかくも價なき人間であッたのだ。けれども、一度許してしまッた心を瞬間にして取り戻すことは出來ぬ、今はタンホイゼルが爲めに禱

り、彼が自ら悔改むるの希望に生きるより詮ない身である。

彼女は亂れる劍の間をかい潛ッて叫んで云ふ、

『とゞまり召され！、罪に汚れた此人に劍を加へて奈何なさる？』

『武士の面目を辱しめた奴だ、許すことはならん』

と呼ばはるのは決鬪を叫んだ武士。

『それなら尙更劍の汚れとなりませうぞ』

『靜まれ！』

と王の一喝、喧騷が一時に止んだ。爰にエリザベスは威儀閑雅にタンホイゼルが爲めに辯じる。先づ王に、次に居並ぶ賓客に對ッて、此なる歌客はまだ妖魔の蠱惑が憑ッて居る、今宵の所作は凡て其精神からしたものでないと說き、

『わが君、どうぞ、彼に一の機會を與へ下され、此の人滅罪の行を積んで本

心にたち歸りましたならば、必と今日われ等が心を傷けた非をも了ることでムいます』

と云ひ終ッて氣が付くと、己が足下に罪障深い歌客は跪き伏して居る。奇しき幻象は倏忽にして散り去ッた後に、頭は殘る悔恨の重きに堪へぬ。タンホイゼルは姫の言葉が盡きた時その裾を接吻したが、涙は頰を走つて居た。今わが命は一條の藁片とも惜くない、しかしこの尊い婦人の眼前に、わが、さしも下劣の人間と成り下ッてあッたと思ふのが、心臓を貫く劍よりも痛い。この時王の御聲が遠里よりの反響のやうに聞える。

『おのれ、墮落のもの、永遠地獄の苦みから、その方の身を救ふ途は只一筋、それもその方の踐むに任せてある。今日は巡拜者が遠く羅馬に出發する日取りだ、其隊に加はッて彼地に赴き、罪障の赦免を願へ』

俄然扉外に讃歌が起ッた。先きに路傍の十字架のほとりに聞いたと同じ美

しい唱歌である。タンホイゼルは再び姫が衣を接吻し、物言はぬ眼に哀れみを請うて、衝と身を起し、王に對ッて希望に滿てる聲高く、

『羅馬へ！』

と唯一言、樂堂を驅け出た。かくしてそのまゝ巡禮隊に加はッたのである。

* * * * * *

一歳回ること遲々、世は再び山河微笑むの春である。ヴァルトブルグ城に巡禮隊の歸郷を今日か明日よと指折る人々の中に、エリザベス姫程切に俟ち焦がれるものはないであらう。終日は谿間を見渡す窓際に立ち盡す。夜は晩坐したまゝ、世界の何處に漂泊ふと知らぬわが巡禮者が爲め、幾時となく祈ッた。或時は侍女に伴れだッてタンホイゼルが巡禮隊の歌を聞いたと云ふ山路の十字架のほとりに漫歩く。聽てはそれが日々の課業となッた。實にや一度許したゝ取戻しの適はぬ愛の爲めに、姫はその一生を捧げたのだ、神かけ

ての願は、わが愛人の罪が免されるやう。わが命の存らふ間に、今一度その人の面を見たいと云ふことである。

或る夕暮、姫は平常のやうに十字架の前に祈ッて居られると、歌客ウォルフラムが近寄つて來た。ウォルフラムが姫に對する戀愛は曩日と同じく私慾を脱した尊いものである、彼も姫と同じく熱心に姫が愛人の罪障消えて恙く歸ることを望んで居る。タンホイゼルが目出度歸ることが出來れば、姫の氣も引きたち、その健康も回復するであらう。ウォルフラムは今エリザベスがさしも焦悴の姿に甚く驚いた。

『姫君、又春でムります』

と聲をかけて、

『巡禮隊は、もう歸らんければならぬのですか』

姫は跳びたちながら

『何ぞ音信が御座りましたか』

と訊ねる、

『いゝえ、まだ何も。けれどペテル僧正は此の月が缺け落ちぬ間に歸るだらうと仰しやいます』

と聞いて、姫は

『呼々、神樣、はやく彼等をおかへし下され……』

と云ッたなり、疲れた體はまたも十字架の前に屈んでしまう。ウォルフラム傷心く姫の面を熟々眺め入るとき、姫は急に頭を廻して、物を索むるやうな目には喜悅が輝いた。

『あれ、お聞き召され、あの唱歌ですよ、聞えまするか』

と輕く叫んで身を起す。實、それは巡拜者の遠く誦する讃歌であッた。姫は耳敏くもこれを聞き取ッたのだ。巡拜者は遂に歸ッた!。

程なく谿間を縫うて徐々と過ぎ去る一小列、姫と歌客とは瞬目もせずこれを見つめるのであるが、志す一人の姿は影もない、タンホイゼルは一行の中に居らんのだ。

『あの方は決して〳〵歸らんのてせう』

と、靜かに吐息して姫は失望の目を今一度谿間のあなたに走せたが、合破と身を伏せて、か細き聲に祈禱を捧げる、聞くにもえ堪へぬ傷はしき祈禱は斯樣である。『妾は幾何もない生命で御座ります。死はやがてこの苦しい胸を癒して呉れませう。けれど、その短い月日は一念專心に教會に仕へますから、其僅かの功德で何卒タンホイゼルが罪の免されるやうと禱り上げまする。』

祈禱が終ると、エリザベスは、たち上がて力なく城の方に歩み去る。ウォルフラムは其姿の見えずなるまで目送しながら、奇しくも掻き亂される胸の中に、もう姫の生きた姿が見られないのだと云ふ氣がした。

日は蚤くに沒した。黄昏は深く身を圍繞ッて居た。けれども歌客は清き少女が祈禱に尊さを加へた小さき十字架を去り難に遑ふのだ。夕の星は遠丘の邊に寂の光を放げる。それが何やらエリザベスの靈魂のやうに思はれ、湧き來る詩趣を一律の小歌に寄せて、

おゝ汝、おゝ尊くも
美はしき夕の星を！

と謠ひだした時、一人の巡禮者が身邊近く歩んで來た。衣裂け足傷れて悄々と歩む。ウォルフラムは一目にして其人と知ッた。

『タンホイゼル！』

と叫んで、

『御邊がその樣は？、よもや免罪が獲られなんだのてはあるまい？、免罪がなくては歸國を許されんのだ』

巡禮者は此には答へず、

『ヴェヌス山に行く路を敎へて呉れよ、自分は路に迷うて居る』

『何だ、魔窟に歸る？、可愛さうの奴だ、それこゝ道に迷うて居るのだ』

と驚き惘れた友は更に、

『けれど、御邊は羅馬へ行ッたのだらう。それをまづ話して呉れよ』

『羅馬へ行ッた』

『罪は赦されたのか』

『見られる通りの態で歸ッたのだ』

とタンホイゼルは苛立ッてかく云ひ放つ。ウォルフラム

『古い友人のことだ、皆打ち開けて貰ひたい。途々定めて多くの苦業をしたことであらう。法王の拜謁はどうであッた』

『吁、云はれる通りだ、代記に記された悉皆苦難苦業は嘗め盡したと思ふ。

身には悔罪の鞭笞を怠らず、わが物は悉く貧者に施した、病者に領ち遣ッた、朝に見る寺毎、夕に逢ふ寺毎に祈禱を捧げた。かくして日夜罪穢の消滅を求めたが、まだ精神の慰安が得られない。軈て法王の前に出て悉く懺悔をした。此時法王は一行の人々の罪を皆許されたが、自分はヴェヌス山に一年を暮したと聞き、且つ恐れ且つ憤ッて「其所退け、其方に與へる慈悲はない。余がこの杖が發芽んで緑の葉をさすまでは！」との宣告。吁々、されば』

と云ッて漂浪の歌客は更に苦々しく、

『自分は何れ終生唄はれた體だ、取るべき路は今は一つだ。妖女は先きに、人の世に身の置き所を失ッた時は、彼母が洞窟に歸れと云ッた。今は其所へ行くより爲方がない。』

ウォルフラムは緊しく友が肩を掴んで放さぬ。

『其所へ行くことはならん。救はれる機會がまだ悉く消えたのではない。善行と獻身の生涯だ、御邊はそれを續けて良い時をまつのだ。聞かれよ、唯今のこと、此の十字架に跪いて御邊が爲めに赦罪を祈った人がある。その人の祈禱が天に達せぬ譯はない』

タンホイゼル、呻いて云ふ、

『もう晩い、晩いことだ！、無益の體だ、見放された身だ。ヴェヌス山の路を敢へて呉れぬなら、自分で其女神を呼びだす』

とて、高く愛の神の名を呼んで、ヴェヌス早くわが煩悶を救へ』と叫ぶ。

忽ち見る暗い黄昏の色が微紅く照りそうて濃い薫香が何處よりとなく漲ッて來る、朦々たる霧の裏にたち現はれる幾人の姿が、笑ひ動搖いて此方を麾く所に、一箇の洞窟現はれ、薔薇色の光はそこから繰りてるのてある。洞口に立つは妖女ヴェヌス。

『さらば〳〵、自分は、あの隱れ家に歸るばかりだ』

タンホイゼルは其友に呼はる。

『否々、御邊が天使は今も天國に願ぎ求めて居る、姫の靈が、エリザベスの

あれ、あなたに！』

と、恰も城門を繰り出た一群の人影を指す。此は手々に松明を持ち、口に輓歌を唱へる送葬者の一隊であッた。近づくまゝ一箇の棺車が見えた、中にエリザベスの亡骸が横はッて居る。タンホイゼルは其行列を目送して、

『エリザベス！、神よ憐み下され、惡魔の手から私をお救ひ下さい！』

と我知らず低聲に祈ッた。すると不思議にも怪しい光はかき消すやうに失せて了ッた。魔女はわが犧牲の永遠に手中を脱れたのを知ッたてあらう。

タンホイゼルは此の奇蹟には顧みもせず、過ぎ行く哀傷の行列を見つめる。行列はウォルフラムが合圖て止まッた。タンホイゼルは力なき歩を移し

て棺車に近づき、恭しくその傍に跪くと、世に立つ身力が一時に拔けたやうになッた。しかも夫と同時に罪と悲みの重荷が失せ去ッて、心は經驗のない平穩を覺える。

『エリザベス、天なる聖き君よ、わが爲めに願ッて下され！』

と呻いて云ふ、縮れる頭が次第に垂れて、額が組んだ兩手に觸れた時である。不意と沈靜が、けたゝましい叫びに破れた。

『奇蹟！、奇蹟だ！』

と一人が呼はる。ウォルフラムは衆を排して、友の傍に行ッた、友は手に聖父から授かッた杖を持つて居る——枝は發芽んで居る——綠葉がさして居る！。

『神よりの御徵示を仰げ！、喜べ、罪が赦された現示だ！』

と呼くと、タンホイゼルは嬉しさに輝く微笑を洩らしたのみ、言葉はない。頭

は垂れ伏すまゝ、エリザベスが眞白い腕に凭ッて眠る。かくて疲れの旅を終へた歌客は、天國の樂の音に眞の愛の調音を聞くであらう。彼が放浪の世路は、一個堅固な精神の信仰に據ッて、平和の正堂に導かれたのであッた。

鵠の武士

『聞けよ、聞けよ、王はアントウェルプへ着御なされた、誰ぞ王の爲めに戰ふものは』

朗かな傳令使の聲に續くは銀の音を吹く喇叭の響、さて此に應ずる武士が百千の呼號、此所廣き平野の民は、今勇武の君が旗下に先を爭ッて走せ參ずるのだ。

此は昔時、獨逸が長い戰亂に疲れた後、捕禽王ハインリッヒを戴いて、始めて內外の敵を逐ひ退けた頃の物語である。此王平時は國內を巡幸して民の辛苦を聽き、公正な裁判に大小の寃罪を解かれる。戰時は自ら軍兵を徵集して戰陣に立たれる。今度アントウェルプの行幸は二個の場合を兼ねたものである。

匈牙利が近頃王に歆意を挾んで開戰を布告した。それて王は徵集の爲めにアントウェルプに來られた。此所は元來ブラバント公國の首府でハインリッヒ王に取ッても大切な都市だが、來て見ると陰謀私鬪の巷となッて居る、王は先づ此を治めねばならんのである。

蓊蒼と繁つて高く青空を蔽ふ一株の樫樹の下に、王の御椅子が設けられた。此の樹はシェルト河畔に立ッて、古から正義の樫と呼ばれて居る。此所に四方の人々は來ッて拜謁を賜はるのだ。この物語が始まる美しい春の朝である、華麗に裝束した傳令使は、吹き立てる喇叭の音と共に高く叫んで居る。

『聞けよ、聞けよ、王は着御なされた、誰ぞ王の爲に戰ふものは』

此に應ずる一整の呼號、人は先を爭ッて驅け參じ、玉坐の下に跪いて忠順を表はす。

王の眼には喜悅の光が輝いた。

『余に斯程の股肱がある、歐を海の彼方へ驅り放つのは易々たる業だ。』

股肱と頼まれた人々は一々謁見を仰せ付かる。中に先年王に從ッて丁抹と戰ッた貴族が居た。王は近く進めと命じ、

『テルラムンドのフリードリッヒ、其方とは久しい友人として余が訊ねたいことがある、ブラバントの都は今内輪の爭て君主も決定らん體裁はどうしたのだ』

テルラムンドのフリードリッヒは低く首を屈めた。額隆く、眼鋭い長身の男である、重々しい語調にも何處か落付かぬ箇處が見える、

『目下紛擾の有樣、御耳に達して恐縮に存じます。實を申上げますと、故ブラバント公爵は拙者の友人て、其亡くなる時二人の子女乃ちゴッドフレイ及びエルザの後見を拙者に托したのて御坐います。て拙者は專心にその敎養の任に當りまして、他日ゴッドフレイは公國を襲ぎ治め、またエルザは

——何事も申上げまするが——拙者が妻と致すことが出來る時を俟ち望んだのてムいました。然るに此等の希望は皆徒爲となッたと申すのは、エルザは傲慢の女て、ゴッドフレイに對し、陽に切な友情を裝ひ、暗には己れ公國を横領しようとした形跡が歴々としてムいます。

一日、二人は森より河畔の方へ例の如く散策に出ましたが、夜に入ッてエルザのみが戻ッて參り、如何致したか眞青になつて身を震はすばかり、ゴッドフレイが事を尋ねますれば、己と手足を捩ぢ悶えて獸慾くが應、奈何に賺しても口を利かぬ始末。て今日までゴッドフレイが行衛は知れませぬ。エルザが河中に押し落したのか、さもなければ人をして暴力を加へさせたのだと云ふ疑惑が霧れんのてムいます。

此事件より拙者は無論エルザと結婚致す譯に參らず、彼女に代へて選びましたのは——今陛下に拜謁を願はせたいオルトルードと申す女、彼の驍名あ

ッたるラアドボード王の娘てムいます。プラバント州は衆人の認る如く、元來はと云へばラアドボードの領地てムいますから、拙者は妻の名義て此の州を要求するのて御座います。』

云ひ終ッて彼は妻の手を執り、近く王の御前に導いた。オルトルードは極めて美人てあるが、姿容はむしろ男性的で、眼居は蹲まる虎のやうに油斷がない、彼は今女王の嬌態を作ッてその頭を屈めた。

王は先程からフリードリッヒの述說に額を顰め、他に人を求めるがやうに四方を見渡される、王が疑念を見て取るフリードリッヒは、身を回らして衆人に對ひ大音揚げ、

『自分はプラバントのエルザを同胞の下手人と公言する。敢て此を非とする勇士は進んて爭はれよ』

と膽太くも呼ばはッたが誰一人動くものがない、たゞ彼方此方に肘めき呟く

音や、澁面作ッて頭を打ち振るものがあるばかり。

王は衝と立ち上ッて、わが楯を樫の樹の枝に懸け、

『これは正義の樫だ、只今の詮議終へるまて、余はその樹下を去らぬ。判決を布告するまて、誓つて此の楯を手にせんのだ。』

とて再び傳令使を走らせ、古法のまゝに事件を決する由を宣告せしめた。次にプラバントのエルザを召される。

宣告を聞いた人々は何れも堅唾を呑んてエルザを俟つ。暫時經つと遙かに現はれた一隊の貴人、二人づゝ相並んて徐かに歩を刻んて樫の木に近づく。中の眞白に裝束うた一人がエルザてあつた。頭は露なるまゝに、柔く渦卷いて双肩に振り落ちる黄金の髪、遠いものを見つめるやうな碧の眼、苦悶を宿す青白い面は見るからに人の心を動かす。其人が進み近づくとき、オルトルードは惡くしい眼を吳れたが、群衆は押し合ひ寄り合ッて、さも可憐だと云

ふ面付に、彼女に對する昔日の愛情を表はすのであつた。

王もこの美しい幻象に打たれたらしい、熟々と打ち護目つたが徐ら身を傾け、其手を執つて云ふ、

『其方がブラバントのエルザか』

エルザは默して首を下げた、組み合せた兩手は胸を抑へて居る。王は重ねて、

『其方は弟殺しの罪に問はれて居るのだ。何ぞ云ふべきことがあらう』

『可愛さうな弟は！』

と叫んだのみ、エルザは己が嫌疑には何の辯解もしない、王は更に

『御話しなさい、此所に事實を申さんければ、其方が罪と認めるより途がないのだ』

エルザは此時目を上げて王を見、僅か勇氣づいたやうてある。四邊は寂寞

と衆目は等しく此方に注がれて居る。エルザの聲は低いが、澄み透る美しき音の抑揚さへも明かに聞き取れた。

『妾は悲しいこと苦いことが御座います時には、天に御祈をして御扶助を願ひます。この頃はそれが毎度て御座います、實、幾度とないのて御座います。祈禱は遂に聽かれて一つの夢想を授かりました。美々しく甲うた武士が夢中に現はれ、妾が何時なりと其方をお呼びする時にお見えなされて妾が代戰者となつて下さるとの御告げて御座いました。どうぞ、わが君、其武士を妾が今日の代戰者と致さして下さいませ、妾が寃罪は其人が證左を立てなさいます』

彼女が言葉は何等の辨解となつて居らぬ、然し其態度が人を動かし人を信ぜしめたのである。群衆は均しくエルザの無罪を叫んだ。王御自身も何かの口實の下に彼女を許さうとなさる氣色だ。テルラムンドのフリードリッヒは

臆面ず進み出て嘲けるがやうの調子て、

『わが君、今聞く所は強ち無いとも限らんやうな夢物語と存じます。夢中の人間ては始末が付きませんが、しかしエルザ殿が何處からなりと代戰者を尋ねだすと申すなら、拙者は喜んて相手を仕りませう』

王は心配さうにエルザを見やられる。少女の面は希望に輝いて直にブリードリッヒに承諾を與へた。王は決戰場を設けるやうにと命じ、古法のまゝエルザが罪の有無は二戰士が勝敗に據つて裁くとの旨を傳へしめられた。傳令使は此所に再び走り出てゝ一呼吸長く喇叭を吹奏するや高聲に、

『エルザが爲めに戰はんものは、天の正義の下に出て合ひ召され』

と呼はつた。應ずるものがない。少時は物苦しき程に靜まり返つた。ブリードリッヒや、オルトルードは可憐の少女が方に切りと冷笑を浴せかける。エルザは叫んだ。

『わが君、もう一度呼ばして戴きたうムいます。彼の武士は其家が遠いため聞かなかつたかも知れません』

『もう一度呼び立てい』

王の命に喇叭は再び遠く〳〵響き渡る。天地は再び靜まり歸ッた。エルザは跪坐いて禱ッて居る、體も心も大空のあたりの尊き御膝元に投げ伏して禱ッて居る。忽然河畔に近き一人がこの沈寂を破ッて呼ばはッた。

『鵠！鵠！鵠の後から武士を乘せて舟が來るわ！』

衆目は一時に向き顧ッて紆れる流の彼方を眺めた。呼びしに違はず、一羽の鵠が悠々水面を足掻いて一隻の小舟を曳いて來る。舟には武士が居る。

『不思議！奇蹟だ！』

その武士が銀の甲冑は眩く日光を射返へしながら、近くまゝに聲もえ立てぬ此所の岸に舟は着いた。件の武士は岸に上り人々に會釋する前、先づ鵠

を舟より解き放ち、優しく訣別の歌を謠ふのである。

多謝す、汝に、忠なる鳥、
歸れよさらば河のかなたへ、
胸の和毛に波きるきる
歸れよ幸ある東の方へ、
なれしなれてし東の方へ。
汝がめでたき業を終へぬる
さらばさらばよ忠なる鳥。

鵠は悲しげに頸を傾け、軈て中流に對ッて泳ぎ去ッた。武士は王の方に振り向き、

『陛下、拙者は御召に應じて參じたエルザが代戰者でムります』

と云ッて頭を下げた。

『勇士よ、何人とはまだ存せぬが、善くぞ參られた』

とて王は更にエルザに對はれ、

『和女は此なる武士を代戰者と致すに異存はないか』

と訊ねなさるに、エルザは唯膝に屈んで獨言くがやうに應へるのだ。

『これこそ妾が夢中の武士でムいます』

王は佩せる劍を拔いて、三度樫の樹に掛けた楯を打ち、決戰準備の喇叭を促がされる。喇叭は鳴ッた、テルラムンドのフリードリッヒは澁々場内に進み出る。彼は、よもや、斯樣の仕儀とならうとは豫期しないのだが、今更前言を取り消すことは出來ない。

無名の武士は跪坐くエルザを靜かに扶け起し、敵に對ふ準備をする。王の楯は再び響いて、二戰士が二振の刀は嘎と交はッた。

然し永く戰ムの必要はなかッた。武技の巧拙は始めから見えて居た。フリ

ードリッヒが猛烈な數度の打擊を、此方は輕くあしらひながら、忽ち其劍を卷き落す、活殺は今や鶴の武士が手中にあるのだ。

フリードリッヒは命だけは助けられた、然し決戰の法に從ひ、彼は僞誓をしたものと認められ、其場に追放に處せられたのである。オルトルードは始終物々しげにその光景を打ち護目ッて居たが此また悄々立ち去る夫の後に從ッた

武士は此には目も呉れず、エルザ姫に對ひ兩手をさし伸ばした――愛を求める時の古振である――うれしく走り寄り、われを其人の腕に絡ませた。少女は『君こそ妾が』と呼く。武士は昂然と王が方に向き直り、諸人も聞けよと高く、自分が今エルザの愛を得たことを奏した。ハインリッヒ王は至極の御機嫌である。

『余も夫に快諾を與へる、エルザと共にブラバント公國も其方が領土となるのだ』

此を打ち聞く群衆は均しく歡呼して空高く帽子を投つた。新公爵たるべき武士は天晴の風采、横着者のフリードリッヒは元から人々の氣に入らなかつたのだ。武士は王に申し上げる。

『拙者はエルザ姫から唯一つの約束を欲しいのて御座います、若しこれが拒まれるなら、唯今の許嫁も取消す外は御座いません』

王は其約束を訊ねられる。武士が云ふ、

『拙者が名と、何處から參つたかと云ふ、この二つは尋ねることを姫に許しません。拙者が身分の卑賤ならぬこと、姫が夫として恥かしからぬものであることは、彼女自身に判つて欲しいのです。拙者が過去の生涯に就いては一言たりと聽くことを許しません。此の約束は出來ませうか』

と心配さうにエルザを顧みた。エルザは罪なげにわが武士の面を仰いで、躊躇もせず、必ず其を守ることを約した。

鵠の武士はエルザ姫の額にわが唇をあてた。王は座を離れて互る〳〵二人が手を執られ、

『余はエルザを引き受けて、結婚の終へるまでアントウェルプに滯在することにしよう。では城に入つて早く喜びの準備ぢや〳〵』

群衆は歡呼して押し合ひ〳〵、王の楯は樹から下される。楯の上にエルザを載せて勇み叫んで城に向ふ。鵠の武士は自分の楯に擔がれたのであつた。

ブラバントの人民が狂喜じみた騷擾を演じ居る中に、此に關かることの出來ぬ唯二人がある。フリードリッヒと、オルトルードは、一朝にして其富貴、權勢を失ひ生命さへも不安の有樣に陷つて、己等が邪惡に對する正當な罰を蒙つた譯である。フリードリッヒは其儘ブラバント國を去り他邦に運を開かうと云ひだす、然し、剛氣のオルトルードは應じない、彼女は常に夫が奸略の參謀であつて、今又密かに毒計を案じるのだ。

二人は身に襤褸を着け、暗に乘じて、御所近く忍び込んだ。宮内の歡聲が手に取るやうに聞える。

『嗚呼、おまへの言葉を聽かなんだら、乃公もあの中に居つて……あゝ！』

と氣弱なフリードリッヒは呻くがやうに云ふ。

『泣言はよしませう、此方にはまた勝算があるんだから。良夫、若し妾の云ふ通りなさるなら本來の世になれますよ』

『どうすれば？』

『あなたも、あの武士が請求した約束をお聞きでせう。あの男は的然、魔法使ですよ、わたし等は其證據を掴めば占めたものです。それにエルザは決してあれが名を聞かないと約束し居ッたではありませんか、何とかして其言葉を破らせさへすれば、魔法使の男は消え失せるに決つて居ますわ。さうではありませんか』

フリードリッヒは急に元氣づいて周圍を見まはしながら、

『オルトルード！わが妻ながら、おまへは本當に神だ、神女だ、ではどうしような、二人共一文無しの姿で追放人になッて居るのだぜ』

『ようございますよ、一寸靜かに！露臺に誰かゞ歩いて居るから』

露臺の人はエルザであつた。エルザは今宵星清き空の下に我が身の幸福を飽かず眺はつて居る。今し窓洩れる薄紅の光はその美しい片頰を流れる、オルトルードは小足を盜んで欄干を廻り、突然に驚かされた姫が前に現はれた

『御免し遊ばせ〳〵よ』

と狡猾な女に低聲に叫んでエルザが足下に、階段の下に平伏した。

『何人です、あなたは？』

『わたくしは追放人でございます、あなたの大層なお幸福につけても、不幸なこの身を憐んで下さいませ！』

『おゝオルトルードさま！』

と驚かされたエルザは思はず高く、

『お可哀さうに、わたしは何もあなた方をどうしようとしたのでは御座いませんよ、あなたの御良人が御自身てあの樣の仕儀にお成りなのですなから』

幸福な姫の心は今宵嬉しさ餘る體の中に和いで居るのだ、平伏す女は益々低く出る。

『それには何とも申開きが御座いません。でも貴孃は、この儘妾を廣い世に追ひ遣つて、乞食となさる御心では、よも、在らッしやらんでせう』

『いゝえ、決してさうはしません、あなたをお庇ひ致します、さあ御出でなさい』

エルザは顧みて戸口に居る二人の侍女から灯を呼んだ。オルトルードは

素早い瞥視を物陰なる夫に與へて、姫の跡に從ふ。

其夜からフリードリッヒは近い寺院の内に隱れて、オルトルードが計略の圖に當る時を俟つて居る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

婚儀は翌早朝に擧げられ、それが終はると捕禽王ハインリッヒは日程を置かず戰爭に赴かれることゝ決定ッて居た。

朝の日が宮殿最下層の窓列を射る時、魔杖で打ち起されたやうに婢女僕丁が一齊に群り集ッて壁や柱や室々を旗に草花に裝飾立を始めた、日光が殿中の角々まで射し渡る頃、やがて、一人の傳令が走り出てゝ式の近きを報ずる、王は戰爭の大事を控へなさるから猶豫は許さぬとのことである、第二の傳令は更に走り出た、かの武士は公國を受領するには應諾を與へない、唯ブラバントの後見人と云ふ名義を受け、婚禮の濟むや王の軍に從ッて勾牙利人と鬪ふ

との布告である。

この傳令が言葉終る間もなく、四人の扈從は宮殿に導く階下に現はれてエルザ姫の御成を呼ばゝッた。

次いで現はれる白衣の侍女幾人、その後より數多の貴人に侍づかれて今日を晴れと裝ひを凝した新婦が美しい歩を移すのである。オルトルードも華な服裝て從ッて來る、エルザ姫はこれを毒ある蛇の螫すとも知らず、今日の日の正目を頒つ積りて伴ッたのだ。

婚儀に列する一隊は徐々と宮苑を過ぎ十二分に開いた大會堂の戸口に向ふ、左右に居并ぶ侍婢等は氣使はしげに各自其女主人を見遣ッて居る。エルザが門前に達した時てある、オルトルードは俄然走り出て身を立ち塞げて呼ばゝッた。

「いや！、あなたが先に入ることは相なりません。妾は貴女よりも身分が上

ですから妾が先に立つのです』

『なんと仰しやいます？』

エルザはぎよッとして後方に退避いた、オルトルード、

『貴女の良人となる、彼の名もない武士は詭策で以て勝利を得たんで、妾がまだブラバントの正當な公爵夫人だと云ふことです』

エルザの面は怒に燃えた。

『あなたは……妾の恩義に對し善い返報をなさる、勝敗の正か不正か、公衆の前に決定たものを、今更、無法な、其所お退きなさい！』

オルトルードは頑として動かない。

『おほゝ、貴女は御立派な郎君が出來ました。それで郎君の名も御存じない、あの男の來歴と人柄と解つたなら、……それこそ……』

と疑惑を挑撥せさるやうに云ッて呵々と嘲笑ひ、

『敎へて上げよう、彼は魔術師だ、魔神に扶けられて妾が夫に勝ッたのだ』

『嘘を、言葉にも程があります、貴女は惡むべき……』

エルザは、われにもあらず激しく言ひ罵るのであッたが、此時王の出御を叫ぶ從騎の布告に爭援は磯と治まる。王は諸々の武士を率ゐて近づかれる。鶴の武士はその右列に歩んだが、此場の騷擾を見、急ぎエルザの傍に寄り語靜かに何事だと尋ねた。激せるエルザはオルトルードを指し、

『この怖しい女が妾を通さず、貴郎の惡口を言ッて居るのです』

武士は鋭い眼にオルトルードを睨んだ、此の一瞥に流石の毒婦も身を震はして縮んでしまう。武士は低聲に退いとれと命じた、王も門前に進まれ、何ぞあるかと尋ねられる。

『わが君、もう何事も御座いません』

と武士は戰慄く新婦が手を執つて寺院の階段を上る。

階段を上り詰めて扉前に來ると伏れたる第二の障害が起り立ッた。ラルラムンドのフリードリッヒは先夜より此所に隱れて、今の活劇を覗ッたが、忽ち扉陰を跳り出て、

『おまちなさい、エルザ、和女は愚な娘だ、一體和女は誰と結婚するのだ、其男は魔術師だ、幻術で拙者に勝ッたのだ、幻術で……』

と連呼する、エルザは絶え入るばかりに驚いた。武士は扶け抱へて優しく此れを云ひ慰むるより遑がない。王は勃然聲を勵まし、

『おのれ、憎くきものが、決戰は公正なのだ、エルザが戰士は天から遣はされたのだ、再び余が面前に出ると容赦はせぬ！』

フリードリッヒは態と恐れ入ッた樣に退場する。これよりは何の妨害もなく會堂へ入ッた、かくして大風琴が喜びの樂を響かす中に、鶴の武士とエルザ姫とは夫と妻と祝福せられたのであッた。

其日は終日の饗宴があッた、老少男女を問はず、一齊に王から御馳走を賜はる、プラバントの新後見の名が發表せられたのは午後で、夜はまた、宮殿內に大層の宴會が催された。

それが終へて、古い風習のまゝ、新夫妻は數多の侍女の先導で新室に進む、二人が扉を排くを相圖に、侍女等は同音に一章の歌を唱へる。

くはし人をあてなる人を
みちびきて、こゝの御むろに

と疊み連ねるこの小歌は其後の幾世幾多の新婦が耳に響くのであらう。侍女等は、そのまゝ歌ひながら、此處もとをたち去る。歌の末が遠き宮のかなたに消えた時、武士は、やさしく姫が手を執り、呼いて云ふ、

『エルザ、和女は眞實に拙者を愛するのですか、または、義理の上から止むなく結婚したのですか』

『妾は夢想の中に御目に懸ッた時から、貴郎を愛して居ります、けれども、貴郎は奈何して妾にお見え遊ばしたのてせう』

『前にも云つたやうに、拙者が體は天から遣はされたのだ、しかし拙者が愛の力で、今度の厄難なくとも此處へ來られたかも知れない、和女を愛するその力で、エルザ！』

エルザが聲は輕い叫びとなる、

『妾の名が、貴郎の御唇に、そのやうに美くしく響きます！もし、あなたの御名を妾が唇に上せることが出來るなら……』

武士は默してエルザの面を眺めたが、手を執つたまゝ、窓際に伴れたッた、

『此黄昏の芳薫を吸ッて御覽なさい。露に濡れたその手近の薔薇の香を除いて、種々な芳薫がしませう。海を越え牧場を越えて和らかに吹く風は何日ぞや外國の河邊海岸に起ッた奇しい記憶を罩めて吹く、が、その記憶は何で

あッたかゝ知れぬ、判然せぬ爲めに、益々幽しく可懷かしいのてす。わし等は互に睦しくして來る日を樂しく暮しませう、過ぎ去ッたものには只その判然せぬ可懷いと云ふのて滿足しませう、判然する世には神の不思議が消えてしまうのてす』

エルザは何處を不安らしく、

『左樣で御座います、愛し合ッて樂しく暮しませう。けれど今日のやうにあんな惡口を受けるときはどうしたら善てせう』

武士は氣輕に受けて、

『まだあのことを考へて居なさる、彼の女なら氣にかけるに及ばない、何も拙者を信じて下されば、それて善い』

『あなたを信じるッて、妾はあなたの妻て御座いませんか、妻として妾をもお信じ下さッても善てはムいませんか』

『でも、エルザ、和女は拙者が祕密を尙ぶと云ふ約束をしたのだ、それは決して不正暗黑の祕密で無いことは明言しておく、一點の穢れもわが心に宿らんのは、拙者の顏にも見え透くではないか』

『けれどもフリードリッヒとオルトルードが、貴郎のお身の上を知ッて居るとは何で御座いませう、……あの言葉が妾が胸を離れんのですもの……』

神經亂れたエルザは身を震はして良人に縋り付いた、彼女は容易く今日の毒計に當り終ッたのである。

武士はそれと察し、氣永く狂ひかゝッた心の鋼機を撓め直さうとする。窓際の椅子に、河面の見える樣に可憐の妻を勞り下し、何がな心を他に逸せてやらうと、

『御覽よ、水に映る月光の何と白いことだ、河は一線銀色のリボンを流して居るわ』

『して、あら！御覽遊ばせ、鵠の小舟が見えます、貴郎を迎へに參るのてせう、あれ鵠の小舟が？』

姫が眼は怪しく輝いて銀流を貫く暗の一方を指す、

『確りしなくてはいかん、何も舟は見えない』

『あゝ、妾は奈何云ふことになッても、この祕密が！……、妾はお聞きします』

『エルザ！』

『どうなッても……、貴郎の御名をお聞かせ下さい』

武士は、吁と嗟嘆の吐息を呑む、

『エルザ、エルザ！その言葉は？もう云ッて呉れるな！』

エルザは狂亂となッて居る、

『あなたは何處からお出てなさッたのです？』

約束は破られた、萬事休す。此時扉のかたに物音がして、内に亂入するものがある、フリードリッヒは日頃親しくした四人の貴族を語らひ、鵠の武士に最後の襲撃を企てたのだ、然し再び彼は不足の敵手であッた。物音を聞くや武士は躍り立ッて己が劍をかい取り、室の中央にフリードリッヒを對へた、激しきは二打、三打、惡漢は斬られて磓と床上に殪れる、徒黨の四人は何れも驚き怕れて手出もせず、阿容平伏して哀憐を請ふのであッた。

武士は騷かず、殪れた仇を指し、

『わが君のもとにこの死骸を持ち去りなさい、明日、日出と共に樫の樹の下て王に謁見することにする』

命ぜられた四人は低頭して亡骸を運び去る。

此の慘じい光景に氣を失はんとしたエルザは、今良人の肩に頭を支へて歔欷くのであッた。

『お許し遊ばせ、妾は無法な今の言葉を取消しますから……どうぞ、……今の言葉を……』

武士は此には答へず、いたく名殘惜しげにエルザが額に接吻し、呼鐘を鳴して侍女を呼んだ。

『エルザ姫は手前がたに托せる、日出とならば婚禮の時の服裝をさせて、わが王の御前に伴ッて呉れよ、其處て拙者は問はれた質疑に答へる積だ』

侍女等は怪しみ憫れながらエルザの傍に集まッた、兩手を差し伸べ憐れみを厠ぎ求める彼女を顧みもせず、武士は首を垂れ言葉なくして室を歩み出たのてある。

* * * * * *

翌朝王は正義の樫の下に再び謁見を賜はる、此日は出陣と決ッて居るので走せ集まる數多の武士はブラバントの新後見を首と仰いて勇ましい戰爭をし

ようと云ふのである。

時恰も王は出御になッて將士に拜謁を許される所へ、四人の貴族はテルラムンドのフリードリッヒが屍を舁き載せて現はれた、オルトルードは涕泣して從いて來る。

王は其理由を質される、人々は鵠の武士が自身此が辨疏を陳べる旨を申し上げる中に、エルザは侍女に扶けられ、悄然と進み出た。彼女は昨夜のまゝ新婦の盛裝を着け、面焦れ頭髪亂れて眼は赤く泣き腫らした樣子の平常事と見えないので、群衆は均しく憐憫の叫を洩らす。王は急ぎ御座を離れ、エルザを扶け勞はッて、

『これは何事だ、誓ッて其理由を聞かなければならん』

と甚だ逆鱗の御氣色である。

『陛下、鵠の武士が今に見えて審に御答を申し上げます』

とエルザの侍女が御答をする、王はまた何事か仰せられようとした時、彼の武士は既に群集の中に入ッて居た。彼を戴いて戰陣に赴くことゝ思ふ人々は歡呼して迎へるのであッたが、武士は只淋しき笑顔に頭を打ち振るのみ。

彼は、初日と同じく輝く銀の具束に身を堅め、些か頭を傾けて物思に沈むが如く、遲き歩みに力なく王座に對ッて進む。

『さあ其理由を聞かう』

と激せる御氣色に王は鵠の武士が拜禮を返しもやらずフリードリッヒが死骸を指し、

『先づこれが誰人の仕業か聞かう』

『正當の防禦で私が此人を殺しました』

と武士は猥狽てず答へて、夫よりフリードリッヒが、わが室に闖入した一條を說き、四人の貴族の證言を求めて、最後に、

『陛下の御許を蒙ッて、私は事の邪正は此の群衆の判斷に任せます』
と辯解し終ると衆は聲を均しくして、鶴の武士には罪がない、神は彼を送ッて、そこの僭越者、卑怯者を此國から除いたのだと叫ぶ。
王は此を聞いて
『余も其方の所業の正しいのを認める、然し余が特に保護を加へる此のエルザが悲嘆の意味が解らん』
『陛下、その事て御座います、私は御前に於てエルザ姫が質疑に答へる約束を致しましたが、これまた陛下の御訊問にも答へ上げることになりませう』
と武士は恭しく云ッて、更に群衆に對ひ、
『忠勇なるブラバントの戰士各位、各位は今日拙者と共に戰陣に赴くことを期待せられたであらうが、その事は不本意ながら出來ぬやうになッたので す、拙者は此處に身の來歷を語ッて直ちに各位に別を告げなければならぬ』

不平の騷擾が四方に起る、武士は身動もせず、鳴の靜まるを俟ッて居る、少時にして群衆が寂りすると彼は再び語る、緩く力の籠ッた語調で、
『此處を去る遠くサルヴァント山と呼ばれる聖山がある、知られる人もあらうと思ふが、その山上に「聖杯寺」とて淸淨人寰を脫した山砦が聳える。寺院には世界至尊至重の遺物なる、救世主が最後の晩餐に用ひられた彼の聖杯が藏められてあります。抑も此の聖殿を守護する武士は、浮世の榮華を斷念して、善行と献身事業に一生を捧げる覺悟を要する、して聖杯守護の武士は其報酬として不思議の力を賦與せられる、彼等は遠きに赴いて思ふがまゝに弱きを扶け、苦しめるを救ひ、戰ッては必ず勝つ、しかし一度其力の來る祕密を露はす時に、直ちにサルヴァント山に歸らんければならぬ。
かくして自分はエルザ姫の戰士として此國に遣はされたので、其使命を果

さば永く各位と共に住ひ、姫の愛と信を得ることを望んだのですが、それが適はぬ、仇人は姫を蠱惑して、自分の來歴と名とを明させたのだ、自分は素性を告げなければなりません。云ッて憚かる素性でもない、自分は聖杯守護の首將パルシファルネが子にさる者ありと知られた、ローングリンである』

四邊は聲を呑んで、耳を欹てゝ居た。物語の終る頃、河邊の近くより、

『鵠！、鵠！、また鵠が見える、』

と聲々に呼ばゝる。エルザは地上に伏し轉んで、ローヘングリンが脚を抱さ言葉四途路に悲み訴へるのであッた。

『どうぞ見捨てゝ下さいますな、妾を殘して……生きる甲斐が御座いません』

ローヘングリン手を擧げて彼方河流の彎曲を麾けば、鵠は頸を高くさし伸

ばし小舟を曳いて近づいて來る。

『さあ、これは天の御召だ、外に致し方がない、さらば戀人！』

とエルザを抱きおこし、永き別を惜むのであるが、姫は此處去なせじと、狂はしく絡み付くを靜かに押し放ッて、

『貴女に此の劍と角笛とを殘しておきます、此を帶びて戰場に臨めば必ず勝利を得られる、この二つを弟君の爲に、お預りなさい、弟君はまだ存世です、お喜びなさい、何時かは戻ッて來られる、拙者が若し此國にとゞまることであッたなら、此年の中に伴れ戻ッたでせう』

『けれども、それは失敗ッたのだ』

と突然、嘴を入れて罵しるものがある。誰ぞと訝り顧れば、オルトルードは此所ぞわが最後の勝利と毒々しく喋舌り續ける、

『それが失敗ッたのだ、おまへさんも、嫁御寮も、善う聞き召され、この厄

介な質問をださせて、此の仕儀にして遣ッたのは誰あらう、皆此の妾だ、それから御寮さんの大事な弟をどうかしたのも此の妾、妾はこれで幻術の一つ二つは心得て居ますわ、妾の幻術で、あの子をその鵠に、はゝゝゝ』

哄々と笑ッて忽ち現はす魔女の相慘じく、今や此處の河岸に着いた鵠を指ざして居る。王を始め一同は呆氣に取られて瞠若て居るばかり。

ローヘングリンは魔女が口を利き始めた時より、騒かず、跪坐いて大空を仰ぎ默禱の中に神の扶けを乞うて居た、太陽は赫如と彼が尚かき面を照らす、忽ち一道の白光閃くと見たるは白鳩の羽搏き下ッたのだ、鳩は聖杯寺の鳩である。禱は聽きとゞけられたのだ。ローヘングリンは身を起して小舟の繩より件の鵠を解き放つ。すると不思議くも、水上の鳥は失せて岸上に立つは一個の若武者である、ローヘングリン、其武者の手を執り前に進ませて、

『これこそブラバントの正當な公爵ゴッドフレイである、各位を必勝の戰陣

に率ゐる首將であるのだ』

ゴッドフレイは恭しく王を拜した。王も座を立ッて御手に彼を抱かれる、諸將は歡呼の聲を上げる。かくして姫と若武者とが相擁して再會を嬉しむのであるが、オルトルードは口惜しさ腹立しさに上氣したと見え呟と氣絶してしまッた。相かまふ人はない。ローヘングリンはゴッドフレイ姉弟が相抱いて他事なき間に舟に跳び入り、纜を白鳩の小足に結へたが、見よ奇蹟！、小き翼の羽擊きに浮べる舟はさも容易く、漣波を切る、水を切る、漲る奔流を横ざまに斷ち切ッて飄々として駛り行く。

エルザが眼を弟の面から離した時、白鳩の舟は既に遙か輝々たる水の面を小く〳〵走ッて居た、舟中楯に凭れて立つ武士が姿は、白虹の斷片を背にして此世ならぬ光に映じて見えたが、さもあれ、悲し、それもまた小さく〳〵曩昔の夢の美しく消えてしまう。

介な質問をださせて、此の仕儀にして遣ッたのは誰あらう、皆此の妾だ、それから御寮さんの大事な弟をどうかしたのも此の妾、妾はこれで幻術の一つ二つは心得て居ますわ、妾の幻術で、あの子をその鵠に、はゝゝゝ』

哄々と笑ッて忽ち現はす魔女の相惨じく、今や此處の河岸に着いた鵠を指ざして居る。王を始め一同は呆氣に取られて瞠若て居るばかり。

ローヘングリンは魔女が口を利き始めた時より、騒かず、跪坐いて大空を仰ぎ默禱の中に神の扶けを乞うて居た、太陽は赫如と彼が尙かき面を照らす、忽ち一道の白光閃くと見たるは白鳩の羽搏き下ッたのだ、鳩は聖杯寺の鳩である。禱は聽きとゞけられたのだ。ローヘングリンは身を起して小舟の繩より件の鵠を解き放つ。すると不思議くも、水上の鳥は失せて岸上に立つは一個の若武者である、ローヘングリン、其武者の手を執り前に進ませて、

『これこそブラバントの正當な公爵ゴッドフレイである、各位を必勝の戰陣

に率ゐる首將であるのだ』

ゴッドフレイは恭しく王を拜した。王も座を立ッて御手に彼を抱かれる、諸將は歡呼の聲を上げる。かくして姫と若武者とが相擁して再會を嬉しむのであるが、オルトルードは口惜しさ腹立しさに上氣したと見え呟と氣絶してしまッた。相かまふ人はない。ローヘングリンはゴッドフレイ姉弟が相抱いて他事なき間に舟に跳び入り、纜を白鳩の小足に結へたが、見よ奇蹟！、小き翼の羽擊きに浮べる舟はさも容易く、漣波を切る、水を切る、漲る奔流を横ざまに斷ち切ッて飄々として馳り行く。

エルザが眼を弟の面から離した時、白鳩の舟は既に遙か輝々たる水の面を小く〳〵走ッて居た、舟中楯に凭れて立つ武士が姿は、白虹の斷片を背にして此世ならぬ光に映じて見えたが、さもあれ、悲し、それもまた小さく〳〵曩昔の夢の美しく消えてしまう。

わが夫、わが夫は！、失望の絶叫、聞く人の腸を斷ッて、岸に走れるエルザ姫は漣波の岸に衣を飜へして倒れた。此處に姫が短き夢の世が終はる、短き夢の物語も。

王妃が歎き

今は昔、ブリタニーの一勇士が、英國海峽を渡ッて、コーンヲールなるマルク王の朝廷に行ッた。此の武士の勇名は夙に知れてゐたので、王は彼を迎へて臣下とするのを喜ばれたのである。武士の方でも喜むで止ッた、と云ふのは王には白百合姫と呼ばれた美しい妹がある、武士は此姫を深く慕ッてゐた、そして其愛が竟に酬いられたと知ッて歡喜してゐたのである。彼は王の允許を得て、姫を妻に申受け、華々しい結婚の披露を濟ませて、新婦と共にブリタニーの古城に歸ッた。運命は絶えず微笑むで二人の上に臨むでゐた。彼等は自らを世界中での最も幸福な男女、宇宙の寵兒だと思ッた。

けれども好事魔多く、婚姻後數月にして、武士は病に罹り、長くも病はずに死んでしまッた。可憐、新婦の悲歎は他の見る目にも痛はしい位。間もな

く男の子が生れたけれども、此忘れ片身は彼女の悲歎を鎮め得なかッた。彼女は亡くなッた良人の事ばかり思ひ詰めてゐる。そして其子をトリスタンと命名した、トリスタンとは悲哀の義である。

斯く遺瀬なき悲痛を懷いては、長からずして良人の後を追ふやうな運命になるだらうと、彼女は早くも覺悟して、或日老實なる武士クルネファルを呼び、我が亡き後はトリスタンをコーンヲールの伯父の許に連れて行くやうにと遺言した。そして其後幾何もなく、白百合姫は彼の世の人となり、小い孤兒は母の願望通り、伯父の手に渡された。

マルク王には妻もなく子供もなかッた。それで喜びて其淋しい家庭にトリスタンを迎へた。彼は甥を自分の子として、やがてはコーンヲールの王位を繼ぐ可きものと公表した。

トリスタンは追々生長して、美しい強い若者になッた。特に乘馬と武藝を

嗜み、十五歳の時には、第一流の武士と技を鬪はした位である。老實の武士クルネファルの指導甲斐ありて、言葉も態度も眞に高雅に、勳爵士の稱號を受けた頃には、既に其俠勇は四方に知れてゐた。さればトリスタンの名は當時の武士の典型として持囃され、コーンヲール中、彼に抗ふ者とてはなかッた。

此時より溯る數年前、マルク王はアイルランドの王と戰ッて敗れ、年々貢を納むる約束をした、それからは毎年モロールドといふ武士が貢物を集める。時の人民は此モロールドを甚く怖れた。彼は素より豪勇殘忍な男である、それが追々と附上ッて、年毎に要求が苛酷になり、竟には全國は貢賦の重荷の下に躍くといふ有樣になつた。トリスタンが勳爵士になッたのは丁度此時代である。彼は何か功名しよう事あれと望んでゐたのであるから、早速此國民の窮厄を救はうと決心した、それで彼は此壓制の巨人に戰鬪を挑むだのである。

モロールドは戰鬪の外何事をも望まぬ荒くれ男である。斯のやうな青二才を相手では頗る物足らぬと公言したが、實は喜んで此挑戰に應じた。マルク王は甚く自分の嗣子の武運を氣遣ッた、しかしながら、決鬪の約束は既に出來たのである。引絞ッた弓の矢は、放たずには置かれない。

その中に鬪爭の日が來た。危惧を懷く見物人は此選手の晴れの決鬪を如何なる事かと見に集ッた。アイルランドの名譽になるか、コーンヲールの自由に終るか、此は眞に手に汗を握らせる見物である。しかしながら、モロールドの行爲は公明正大でなかッた。自分に對抗しようといふ無禮者あるを憤ッて、彼は毒を塗ッた槍を携へ、然もトリスタンが未だ身構へせぬに先んじて、先づ一投げ投げかけた。聊かの傷を受けたが、トリスタンは次いで始まッた激しい戰鬪に紛れて、一向氣にも止めなかッた。

若い武士は一刀を手にして躍り出て、身に引き較べては塔のやうに丈高い

敵手に向ッて打ち蒐ッた。猛烈にして然も一絲亂れぬ太刀筋に、モロールドは這は侮り難い敵、太刀業では及び難い、唯剛力を以て組伏せるに若かずと、努めに努めたが、其効はなかッた。彼は今は怒り狂ひ焦れ荒れて、滅多打に打つ。一度彼の太刀が電光のやうに若武者の頭上に落ちた。若し身を翻して空を打たせなかッたなら、彼の首は飛ぶのだ。太刀も折れよと打ッた力が、空しく風を斬ッたので、巨人は自ら制し難く、ヨタ〳〵と二三歩蹌く所を、トリスタンは得たりと再び飛寄ッて、美事首を打落した。

今やコーンヲールは自由になつた。マルク王は貢物の代りに、モロールドの首をアイルランドに贈ッて、自國の自由の證とした。さて此モロールドはアイルランドの皇女イソルデに婚約があッたのである。彼の首が朝廷に達すると、皇女イソルデは憤怒の餘り復讐の誓を立てた。彼女は仔細に首級を檢めて、頭蓋骨に附いてゐた劍の先端の破片に氣が付いた。此は仇の武器から破

れたものに相違ない、やがて此が仇を探し出す便ともならうと思ッて、彼女は其の破れ刃を懐に納めた。

さてトリスタンは朝廷並に人民から多大の稱讃を受けたけれど、實際は樂しくはなかッた。といふのは毒槍の傷が如何しても癒らない。名ある國手に治療を求めても、一向効見えず、日々に重り痛むばかりであッた。竟には到底全快覺束ないことゝ失望をし始めた時、年老いた陰陽師が來て、此の傷は毒の出所へ行けば治る、毒の出所には必ず其解毒劑もあるものである、と敎へた。それでトリスタンは早速旅立ちした。尤もトリスタンといふ名でアイルランドを旅行するのは頗る危險であるから、漂泊の歌客タントリスといふ名を用ひ、身を窶して敵國へ藥を求めに出たのである。

茲にアイルランドの皇女イソルデは種々の藥を調合するの祕術を知つてゐるので名が高い。此風聞を耳にしたタントリスのトリスタンは直ぐに其朝廷

へと志した。イソルデの母なる后と后の侍女とが藥劑の事に能く通じてゐて、其祕密がイソルデへも傳へられてゐたのである。それで憐れな歌客が毒の惱みを訴へて來た時に、彼女は惻隱の情より、手慣れの術を用ひて、疾苦を救治してやる氣になッた。此には勿論トリスタンの凛として氣高い態度と、其哀を求むる眼容が、與かッて力あッたのである。

イソルデは侍女と二人で、種々の解毒劑や鎭痛劑を用ひ、治療に取かゝッた。毒は餘程の惡性と見えて、彼等の熟練と雖も、効を見るまでには長い事かゝッた。それでも元來丈夫な體質であるから、治癒期に入ッてからは、頗る經過が好かッた。

或日の事、トリスタンが眠ッてゐると、イソルデは其傍に座を占めて、熱の工合を見守つてゐた。不圖彼の劍の柄の美しさに氣が付いて、彼女は其を手に取ッて見た。そして何の事はなしに、鞘を拂ッて、煮鮮かな刃の面を鍔

元から尖頭へと眺め上げて行くと、先端が少し破れてゐる。彼女は急に何か思當ッたやうに、劍を持ッたまゝ其座を立ッて、先に刃の破片を藏ッて置いた所に行ッた。劍の疵と刃の破片を合はせて見るとしッくり合ふ。合符を合せるとは此事である。彼女は今の今迄己が敵を看護してゐたのであッた。

丁度其時にトリスタンはイソルデを呼むだ。彼女は急いで駈け付けて、手にした劍を振り上げた。兩方とも言葉を發しない。けれども男は女の目的を其眼の中に讀取ッた。殺す積りだなと思ッたが、彼は身動きもせぬ、唯眼を上げて、女の顏を見詰めた。其眼付の優しさと悲しさには得もいへぬ力が籠ッてゐる。此眼光の魔のやうな力は彼女が初めて會ッた時から認めてゐる所、忽ち音を立てゝ、劍は彼女の手から床の上に落ちた。

其後彼女は以前に勝ッて心優しく彼を介抱した。そして兩人とも劍の一條に就いては一言もいはぬ。彼女の丹精と熟練は効を奏して、竟にトリスタン

は全く快くなり、間もなく歸國する事になッた。しかしながら尚ほ彼は中に新たに燃え始めた感情に就いて一言も彼女に洩らさぬ。洩らしても益ない事と思ッた。彼女は自分が祕密を知ッて、一度は劍を揚げたのに、然も打下さなかッたのは、唯自分が立つ能はざる病弱の身であッたのを憐むだのと信じてゐる。それで彼は言葉の許す限り禮を述べ、感恩の念を表す爲めに、王女の手に接吻を求め、尚ほ機あらば再びお禮に上るといふ約束だけに止めて、本意なかッたが、別れを告げた。

彼がコーンヲールの朝廷に戻ッた時、王は歡喜して迎へた。王は或はトリスタンの身の上に凶事が起ッて、それで音信がないのかと思ッてゐた。トリスタンは王及び朝廷の人々に其旅行の物語を爲し、イソルデの美貌と親切を際限なく褒めはやした。實に其座にあッた人々が妙に思ふくらゐ、熱情的の言葉を用ひて、敵國の王女を讃美したのである。その中にも以前からトリスタ

ンの寵を妬むで、如何にかして其王位繼承を妨げようとしてゐた廷臣の一徒黨は、此機を利用して彼を苦しめようとかゝッた。彼等は王の許に參じて、王妃を迎へて眞の世嗣を儲くる事の急務を說き、それにはアイルランドの王女イソルデを迎へるが、兩國の親交の上から見て、最も當を得たことである し、當今天下にイソルデを措いては、他に美しい女はないと云ッた。

マルク王は此忠言に關して長く熟考した。そしてトリスタンを呼びて種々と訊問した。人を疑はぬトリスタンは何も彼も答へる。答へては必ずイソルデを褒める。それて王は考へれば考へる程、イソルデの面影が忍ばれる。そして竟に正式の手續を以て、アイルランドの朝廷に結婚の申込を送り、能く此處の事情に慣れたトリスタンを其使者とする事になッた。

王の命令を承ッて驚愕したのはトリスタンである。彼は胸が凍るやうに覺え、同時に自分に取ッては如何にイソルデが貴重であるかを切實に感じた。

しかしながら伯父は父同樣の恩人であッて見れば、其恩を報ずるには、此場を合點して其命に從ふの外に道がない。それて彼は少しも惡びれた顏はせず、此苦しい使命を果す爲めに再び旅路に上ッたが、心の中は張り裂けるやうであッた。

トリスタンが拜謁を求めに來たと聞いた時、イソルデの胸に嬉しさの動悸を打たせて今度は約束通り、眞正のトリスタンとして來たのであらう。そして先に言ひ淀むだ事を明白に述べる爲めに來たのであらうと思ッた。それて彼女は手の物を置いて、直ぐに面會し、自分が愛戀の情を婦人としての嗜が許す範圍に於て出來るだけ仄めかした。しかしながら彼女の當推量は全く外れた。トリスタンが使命の趣を聽いた時、彼女が只の今燃え始めた新希望は直ちに消えて、憤怒と屈辱の念が遣る方なく荒れ狂ッた。自分が愛して、復讐の誓までも棄てたのに、其男は見向きもしてくれぬとは口惜しい限りであ

る。けれども彼女は其情緒を表面には見せず、直ちにマルク王の所へ行つて王妃にならう、そして自分の心の苦惱は何人にも――殊にトリスタンには――知らせまいと決心した。

アイルランドの王も王妃も此度の使者を歡むて迎へた。彼等はコーンヲールとの葛藤に倦きて、平和を結び、兩家の血緣を繫ぐ事を喜むてゐた。それで彼等は敬意を表して使者に面接し、王女が愈よ船に乘り込むまで、盛んな宴を續けた。

けれども此歡樂の裡にありて、イソルデは冷然としてゐた。彼女の態度は母を心配させた。これから往く可き新家庭で幸福な生活を送らせたいといふ親心から、母は強い愛の藥を調製して、イソルデの侍女ブランゲアネに渡し、婚姻の夜之をイソルデと新郎とに服用させるやうに命じた。此藥が二人の心臟に入ると、相愛の情忽ちにして起り、樂しい家庭生活が送れるといふので

あッた。

そこでトリスタンはイソルデを船に伴ひ、コーンヲールに向ッて帆を揚げた。彼の心の中に溢れる深い愛に就いては、彼は一言もいはぬ、口に出さぬのみか、擧動にも眼容にもそれらしい素振りを見せない。伯父から托された使命は眼を閉ぢて果さねばならぬ。實に彼は用心といふ度を通り過してゐた。彼女が一度甲板に現はれると、彼は直ちに船底に逃れる。船を漕ぐ人の指揮に忙しいやうな風をして、彼女の面前に出まいとのみ計ッてゐた。

イソルデは此殊勝な心情を汲み取る事が出來なかッた。彼女は幼少から人々に傳侍れ、其の言ふ所は如何なる些細の事でも行はれるが常であッた。されば此度のトリスタンの行動については、非常な憤懣を懷いてゐた。あれほど世話になッてゐながら、赤の他人のやうな取扱をする、と彼女は不愉快な沈默の裡に、兎に角悚えてゐた。けれども航海の終る日、コーンヲールの岸が

見えた時、見ず知らずの人の妻になるのかといふ瞋恚の焔は、トリスタンに對する不平の情をも、遂に破裂させてしまつた。彼女は歎き倒れて、其運命を嘲ち一層の事海の波が昇ッて、彼女を呑去れば可いと思ッた。

侍女ブランゲアネは主人の不機嫌に驚いて、何とか慰めようと努めた。イソルデは頭を擡げ、戸口から外を見た。二人は甲板の稍高まッた所の亭の中へにゐる。此亭からは船の中は何處でも見える。彼女が見廻はした時彼女の視線は操舵車の傍に立つトリスタンの上に落ちた。彼は外目も觸らず船員の指揮をしてゐるが、其顏には隱れたる苦悶と戰ふ懊惱の色が明かに讀まれる。イソルデは稍久しく眺めてゐたが、嘲けるやうな口調で、ブランゲアネに恁ういッた。

『お前は彼の男を如何お思ひだね。』

『トリスタンさんですか、皆が當代一流の、剛勇な武士だと仰有るではあり

ませんか。』

『人のいふ事は信據になりません。彼は當代一流の卑怯者です。』

『まあ！それは如何してでムいますか。』

『彼に卑怯者です。私に逢ふのを怖れてゐます。私の許へは少しも寄り付かず、まるで婢女か何かの待遇をしてゐます。お前行ッて此處へ來るやうにいッて下さい、何故こんなに冷淡な待遇をするのか、其理由を訊いて來ておくれ。』

『では此處へ御出になるやうお願ひ申すのですか。』

『願ふのぢやありません、然う命令するのです。王女イソルデが然う命ずると仰有い。』

侍女は此樣な使命を傳へるのは厭であッたが、主人の命令で仕方なく、靜かに甲板を進むで行き、操舵車の傍に止ッた。

『もし、イソルデ姫からの御言葉でムいます。』

といッた。

『イソルデ？』

とトリスタンは驚いて立上り、危く操舵車を手ばなす所であッた。そして直ぐに我に返ッて、尋ねた。

『どういふ御言葉ですか』

『來て御機嫌伺ひをなさいといふ御命令です。』

トリスタンは命令といふ不穩の言葉を氣に止める程餘裕がなかッた。唯、唯今はコーンヲール海岸の最も難所であるから、此車を手放せない、此處に恁うして働いてゐてこそ、王女の爲めに最も能く盡す事が出來るのだと答へた。

老武士クルネファルも此航海にはトリスタンのお供をしてゐた、彼は其場

に居合せて、王女の使命を聞いた時、思はず嗤笑ッた。

『命令！お大層な話だ。モロールドを殺した武人は何人の臣下でもない。何人の御機嫌を伺ふ必要もない。』

イソルデは聞くともなしに聞いた。そして侍女がトリスタンの謝絶の報を齎らした時、彼女の憤怒は益す募ッた。

『忙しいといッてお目通りをしない積りなのです。彼のお方は一體どういふ身分でせうか。』

『あれがアイルランドで助けてやッた音樂者です。お前も能く介抱して知ッてゐるだらうに。』

『さうでせうか。私今まで氣がつきませんでした。』

『彼がモロールドの仇です。仇と知ッて宥してやッたのに、恁ういふ仕打です。』

『けれども彼のお方は唯王様の命令を行ッてゐるのですから、唯今の無禮は大目に見て上げて下されまし。何も王さまの爲めと思ッて、船の方に氣を取られてゐるのでせうから。』

イソルデは王等は何とも思はぬ、唯此結婚、愛のない結婚で己も人生の悲酸を嘗めるのだと云ふと、ブランゲアネは王妃から托された愛の藥を示して、愛は必ず起る、末長く樂しい家庭の生活が送れるといふ。

藥といふので、イソルデの思想は一回轉をした。自分にも藥を作る事が出來る。寧ろ毒藥を調製して服用し、遂げ得ず、言ひ出し得ぬ此戀の苦悶から免れようと思つた。彼女はトリスタンを戀してゐるが、トリスタンは許嫁を殺した仇であるから、いくら戀しくても慕はしくても、世間の手前何ともしようがない。さりとて此儘默ッてゐれば、愛なき婚姻をコーンヲール王と結ばねばならぬ。

彼女が毒藥の調合を了ッた時に、船は目的地に着いて錨を下した。クルネファルは早速イソルデの許に伺候して、直ちに上陸の準備をして下され、ついてはトリスタンはお伴致す爲めにお待ち申してゐると傳へた。

イソルデは先刻の言葉もあるし、今は死を決してゐるから、容易くは動かぬ。威猛高になッて斯ういッた。

『トリスタンの許へ行ッて、私共は此處でお待ち申すといッて下さい。此處に來て航海中の無禮を詫びる迄は、私共は此處を動きませぬ。』

クルネファルは怒ッて此に云ひ爭はうとしたが、流石老巧の武士であるから此所腹を立てゝはならんと思ひ直し、トリスタンの許に馳せ付け、行ッて王女の怒を解くやうに勸めた。その間にイソルデは例の毒藥瓶を侍女に渡して、

『トリスタンが見えたら、其瓶を私に渡しなさい。二人は其を飲むて何も彼

も忘れねばなりません。然うすれば私は此世に思ひ遺す事はない。』

といッた。ブランゲアネは主人の決心の色に駭いて、

『姫君、まあ何事でムいますか。何卒氣をお靜め遊ばせ。』

といッたが、王女は唯彼女が手を握ッて、諫言は無用だと制した。

丁度其時にトリスタンが入ッて來た、そして言葉を低くして、何御用かを承つた。イソルデは激してゐるから、決して言葉を和らげようとはせぬ。航海中の冷遇は如何なる次第か、何故自分の地位が少しも顧みられなかッたのかと責問した。

彼女の言葉は荒々しかッた。恰も賤民を罵ッてゐるやうであッた。けれどもトリスタンは言葉穏かに辯明した。我國の習慣として、使者が花嫁を迎へて來る途中は、成る可く其御目通りを避ける事になッてゐる。唯其習慣を守ッたのであると述べた。

イソルデは侮るやうな口調を以て、其程習慣に固着する人が、一大習慣を棄てゝゐるのは不思議であると詰ッた。

『其習慣とは何事ですか？』

とトリスタンが尋ねる。

『血で血を償ふの習慣です。モロールドの血は如何して下さる積りですか。』

『それは最早兩國の軋轢が終ッてゐますから、何とも出來ません。只今はコーンヲールとアイルランドとは和睦してゐるのではありませんか。』

『けれどトリスタンとイソルデとは未だ和睦してゐません。』

と彼女は答へた。そして先に身を窶して彼女の朝廷に來た事、彼女はトリスタンの祕密を知ッたけれども默止して、命を助けた事を述べ、其の助けた命を今此處で渡して貰ひたいと迫ッた。

トリスタンは默ッて聽いてゐた。彼の心の中には情緒交々亂れた。そして

彼は最も悲しげに又面目なげに、腰に帶びたる劍を拔いて、彼女に渡した。無論柄を彼女の方に向けて差出したのである。

『此はモロールドを斬ッた劍です、今も尙ほ彼の死と私に施した親切をお悔みなら、此劍をもッて私を殺して下さい。』

『否！』

とイソルデの顏は靑くなり、次いで赤くなッた。そして、

『唯今然ういふ事をしてはマルク王に對して濟みません。貴下は王の使者であります。けれども只今から上陸する前に、私と一緒に平和の盃を擧げて下さるならば、私共の間に和睦が成立ちます。』

といッて、彼女はブランゲアネに向ひ、例の毒藥を注ぐやうに命じた。侍女は色靑ざめて顫へながら、藥の瓶を取り上げた。イソルデはトリスタンに盃を渡した。

『最早旅は終りました。私と一緒に一獻汲むで下さいますか。』

と彼女は曇ッた眼で、彼の顏を瞶めた。

トリスタンは盃を受けた。彼はイソルデの殺意を見て取ッた。此平和の酒は毒藥だと承知した。しかも今の場合死は彼に取ッては生よりも安いのである。これで彼は靜かにいッた。

『有難い平和の酒、喜むで飲みます。永久に和睦の誓を立てゝ、此盃を戴きます。』

斯くて彼は盃に唇を當てゝ飲み始めた。けれども彼が半分飲むだか飲まぬのに、イソルデは聲を立てながら、盃を彼の手から奪ひ取り、殘餘を自ら煽ッた。重い盃は床の上に落ちた。兩人は默ッたなり、お互に顏を瞶めながら立ッてゐた。

斯う二人立ッてゐた數分は、彼等に取ッては十年より長かッた。藥は不思

議な効能を表はし始めた。死に先ッて來る氷のやうな惡寒の代りに、彼等の心は生命と愛情と幸福に漲り溢れ、此三者が混る美しき波は、次第々々と彼等を近く押寄せた。

『トリスタン！』

『イソルデ！』

叫びは夢みる如く二人の唇から出た。そして周圍の世界は悉く忘れて、トリスタンとイソルデは互に飛寄ッて、抱き合ッた。

『あゝ、私は如何したのだらう。』

とブランゲアネが手を揉みながら悲むだ。彼女は毒藥を注ぐ恐ろしさの餘り、誤ッて愛の藥の方を注いだのである。今や彼女は此藥の結果を却ッて危險に思ッた。しかし今は逃げる道とてはない、岸邊の水夫や軍人の聲はマルク王の程近く來た趣を頻りに傳へる。彼女は急いてイソルデが上陸の節着る筈の

衣裳と冠を取り出した。

短い幸福の夢から覺めて、イソルデは早速王妃の盛裝に身を更め、未だ足取り怪しく躓めきながら、未來の良人に初對面をするために兎に角も上陸した。

マルク王は最も鄭重に彼女を迎へた。彼女の顏色の勝れないのに氣が付いて、多分航海の疲勞と思ひ、城中の特別の室を彼女及び其侍女に與へた。そしてイソルデの健康恢復までは、披露の宴や祝賀の會を延ばす事にした。

朝廷は今此美しいアイルランドの王女の安著を喜ぶことが出來たのだ、更に王女がコーンォールの王座を飾る日を鶴首して待つ。

彼女の居室は城中最上の室で、足一歩戸を出づれば、直ちに禁苑である。此處で彼女は一と先づ休息して、尙ほ健康の勝れぬのに託けて結婚の日を延ばさうとした。トリスタンと二人で飲むだのは愛の藥であッたと彼女は承知

してゐる。はげしく彼女の情は燃えてゐる。トリスタンに會はなくては一日も過ごされぬ。それで彼女はブランゲアネを說いて、愛人に會合の合圖をさせた。即ち塔に燈火を置いて、それが消えた頃に來れば、自分は必ず禁苑で待つといふのである。トリスタンとても今はイソルデに劣らず逆上してゐる。彼は此祕密の會合を待侘びた。

さて朝廷には以前から、トリスタンを陷れて君寵を恣にしようと企てゝゐた一人の武士がある。名をメロットと呼むで、狡猾奸惡の男である。常にトリスタンの落度を探し出さうとして心掛けてゐたのであるから、トリスタンが上陸の時の狼狽と其節のイソルデの疲勞の態度に氣が付いて、其原因を正しく推察した。それで今や彼は今夜二人の會合の場を驚かして、其顚末を王に告げようと計畫したのである。

ブランゲアネはメロットの樣子を見て疑ッた。そしてイソルデに警戒す

るやうに勸めたが、彼女は唯トリスタンに會ひたい一心で、一向構ひつけぬ。日が暮れて間もなく、ブランゲアネに塔の燈火を消せと命じ、ブランゲアネが躊躇したので、彼女は自ら消した。

百草は咲き亂れる首夏の月明らかな晩であつた。此月も此花も我が戀を祝福するかのやうに思はれて、イソルデは心も空にトリスタンを待ち焦れた。もう足音がしさうなものと、彼女は禁苑を彼方此方と歩み廻ッたが、花の陰に何者が隱れてゐるか氣がつかなかッた。彼は千秋の思ひで待ッたが、實は長く待ッたのでない、トリスタンは間もなく物陰から現れた。二人は遠慮もなく手を取ッて、小聲で話しながら道を歩き廻ッた。イソルデは先に船上にて彼を殺さうとして毒藥を盛ッた事を自白し、トリスタンは彼女の手で死ぬのは其時の希望であッた事等を話した、若い戀人の談話は何時までも盡きさうにない。

その間侍女は塔の上で見張番をしてゐた。餘り歩き廻らぬやうにと幾度か小聲で警告したけれど、二人は一向無頓着で禁苑中を手を把り合ッて歩く。その中にブランゲァネは急に驚愕の叫聲を發した。同時にクルネァルが劍を拔いて進み出て、トリスタンに遁れよと勸めた。しかし最早晩い、角笛の音がして、王とメロットは狩裝束の一隊を從へて其場に現れた。

イソルデは愧ぢ入ッて地面の上に打伏した。トリスタンは彼女を遮ッて、彼女を衛るやうな體で立ッてゐた。しかし首を垂れてゐる。正面に王の顏を仰ぎ能はぬ。

『此は何事か。』

と王が詰問した。

『私の疑惑は杞憂でムいませんでした。』

とメロットが答へた。そして

『トリスタンは御賢慮通りの忠臣ではムいません。』

王の心の中は怒よりも悲歎が強かッた、彼はトリスタンを子のやうに愛し、口を極めて其武勇を賞してゐた。それで彼は穏かで然も嚴かな調子で、わが意を傳へたが最早致し方のない事只今限り放逐する旨を申渡した。

トリスタンは身も世にあられぬ思ひであッた。彼は王の申渡は極めて至當の事だと思ッたが、尙ほ夢を見るやうな心持でゐた。彼は王には答へずに、イソルデに向ッて、自分と一緒に追放されてくれるかと尋ねた。彼女は何處にでもお伴する、世界の極までも、死の國までもと決然と答へた。そこでトリスタンは始めて言葉を發した。

『臣としての不忠、子としての不孝、私の罪は眞に重大でムいます。特別の御惠みで御宥し下さッた上は、イソルデは私と一緒に參ると申しますから、私は彼女を保護するより外ムいません。それならば此で永のお暇を致しま

す。』

王は尚ほ思ひ亂れて立ッてゐた。邪智深いメロットは、斯く事がトリスタンに好都合に開展したので腹を立てた。そして劍を拔いて躍り出る。

『待て、叛逆人、此で事が濟むだと思ふと間違だぞ、今から俺が陛下の仇を打つ、其處を動くな。』

『叛逆人とは己れの事だらう。陛下の仇が片腹痛い。さあ用意しろ。』

とトリスタンは侮るやうに言放ッて、劍を拔いた。けれども鬪爭は長く續かなかッた。トリスタンは故意に劍を下げて、打たれようとした。其を何人も止める間もなく、メロットの劍は彼を打ッた。

『劍を放て。』

と王は自らメロットの腕を把ッて叫むだ。トリスタンは重傷を負ッて倒れ、イソルデは縋り付いて、彼の頭を支へた。その間にクルネファルは打たれた主

人を扶け起さうとする。

マルク王は從者に命じてクルネファルの手傳をさせ、靜かに涙を拂ッて歩み去ッた。彼は識らずして甥の戀を妨げた。識らずして苦しい使命を帶ばせて敵國に送ッた。今更晩いが始めて其と氣がついて、彼は悔むだのである。けれども何故甥は其なら然うと始めから明白にいはないで、斯く不義を犯したのだらう。此はトリスタンの武士らしい性質には相應しからぬ事と合點が行かなかッた。美しい若い花嫁を失ッたより、甥を失ッたのを、老王は深く悲むだのである。

クルネファルは時を移さず主人をブリタニーの舊家へ連れて行ッた。トリスタンは着後、傷が重ッて殆んど人事不省に陷ッた。唯急促の手當のみ彼の生命を取止め得たばかり。クルネファルは全力を注いで介抱したが、イソルデをコーンオールに置いて來たのが大の手ぬかりであッた。トリスタンは斷え